序＝断片的ヴィジョン（１４）

～１９９５年１２月～

大学闘争・・・に関する批評～資料・集（＊）の序＝断片的ヴィジョン（１４）《特集》

（＊）現在までに　マスコミ篇　通巻第１１号まで刊行

１９６９・９（上・下）
１９６９・１（上・下）
１９６９・２（上・中－１・中－２・下）
甲山事件①＋１９７４・３（上）
甲山事件②＋１９７４・２（上）

（＊＊）序＝断片的ヴィジョン　既刊は　（１）～（９）《特集》
（１０）～（１２）《特集》　（１３）《特集》

仮想被告（団）

目次

（鍛練実習ノート）

序＝断片的ヴィジョン（14）　～1995年12月～

序　……1

＜ヒ＞の根源波動について　……3

＜ヒ＞と＜ヒヒキ＞　……5

感覚と感受ということ　……7

イノチ・ヒヒキ・直観　……8

逆序のサトリ・サヌキ・アワ　……9

アワのヒラメキを入れる――アワの感受性～潜象カン～直観～の鍛練　……11

マノスベ――照らすもの　……19

ヒビキということ　……21

ヒビキ　……24

フトマニ　……26

再び感受性～直観鍛練　……28

アワのチカラを起励する　……31

＜ヒ＞　……32

ラージヒ　スモールヒ　……34

ヒフミヨイ発生図　……36

＜ヒ＞と声音符・図象符　……37
ヒフミヨイの＜フ＞　……38
ヒフミヨイの＜ミ＞　……39
ヒフミヨイの＜ヨ＞　……41
ヒフミヨイの＜イ＞　……42
ヒ・・・ヒフミヨイ発生　……44
アワのヒラメキ（の入れ方）　……47
カタカムナの言葉の特徴　……50
カ・・・ハ・・・オ・・・　……52
ある朝　……54
仮装畑　……55
＜ヒ＞の思念が生き、ふくまれる＜日本＞語　……57
1994・10～　……59
＜イノチ＞　……62
アマのイブキ　……63
大学闘争　……63
仮装被告（団）　……64
甲山事件　……66

地球のアクビ　震源と根拠 ・・・・・・・ 67
ハシカ ・・・・・・・ 68
ヒトツヒトツ・・・ ・・・・・・・ 69
1995・2・2 ・・・・・・・ 70
ヒラメキヲイレル ・・・・・・・ 71
アマの強制振動 ・・・・・・・ 72
アワの発生根源へ・から・ま（い）う ・・・・・・・ 73
潜象への感受性をヤシナヒソダテル＜日本＞語における表音表現 ・・・・・・・ 74
ヒトとしてのイキカタ ・・・・・・・ 77
アマハヤミ ・・・・・・・ 78
相似象第四号における＜ヒ＞の記述 ・・・・・・・ 79
カタカムナ文献にあらわれている＜ヒ＞ ・・・・・・・ 81
脳の落とし穴 ・・・・・・・ 83
アワの鍛練 ・・・・・・・ 86
作業の最終段階で・・・ ・・・・・・・ 88

序＝断片的ヴィジョン（14）

序

刻々の微波動鍛練。アワのミの感受。

声音思念＜ヒ＞――――その根源波動性について。

＜ヒ＞の根源波動をどのように、いかに、自らの内に育て～発生させ得るか。

物質も食も性も言語も思想も・・・も、すべては人間のヒビキのレベルに応じてその本質を開示する。ある分野～領域のみが深度を増す～高めるということはあり得ない。総体性としての深度と個々性の本質。

――→あらゆる＜ヒビキ＞にみちている、その＜ヒ＞のイミ、根源性のシクミ、わかりかた、発生の仕方、深め方、高め方、身につけ方、応用の仕方。

どのような～運動を展開しても、ある偏差をもってしまうというイミ～根拠の、＜ヒ＞からの解明。

人類史の～を越え得る根拠と方法を絶えず刻々に展開しうること。

誰一人として（にも）、ないもののない、その人のアワにむけて語る。～アワをひきだすようにして＜　＞する。

アワの少数者鍛練。

体を弓として。

大我。

＜アワ＞とは、＜ヒ＞のチカラ、則ちアマ界にワされたカムの量のこと。

時間の底へ降りる。
一切の現象のオク・背後域。

本質にきりこむサヌキ言語。そして、
階梯をさし示す不可避のアワの文体。

刻々に一切、として表現するモノが、アワの感受として、脳のヒのミの自己意識としてふまえているべき発生の過程――潜象と潜象過渡のシクミ。

それなくし現象の現象的対応のレベルは、主観的願望にかかわりなく、堕落の一途をたどる他ない。

現実過程の進行にあいわたりつつ刻々の情況的意味を取り出す作業は、対象化の言葉・根拠・物理を、現象や場面の発生根源にカカワル潜象物理〜アワの感受性鍛練から、一層自覚的になされるトキ、はじめて、ココロ・トコロをもち得る。
情況係数は、潜象（アワ）係数として・こそ・提出される必要。

＜ヒ＞の根源波動について

前号――序＝断片的ヴィジョン（13）を、切迫した時間の中で記し、刊行作業し、ごく少数の方に発送するや否や、刊行者に、次のようなヒラメキが訪れた。（1994年4月）

――なにごとも、＜ヒ＞の＜フ＞の＜ミ＞でなければならない。それによってはじめて＜ミ＞の＜ヨ＞の＜イ＞と発生し得る。――

この＜ヒ＞が、＜ヒ＞の音の根本波動量～基底思念が、未だ充分、感受としてわかっていなかった、とキヅク。

アマ―カム　潜象　　対向発生　とは言い得ても、それを＜ヒ＞として、ヒフミの＜ヒ＞として、ヒフミヨイの＜ヒ＞としての、＜ヒ＞の声音思念の感受としては、不充分であったことに気づいたのである。

＜ミ＞（潜象過渡）も＜ヒ＞によってはじめて、＜ミ＞たり得る。

すなわち、カム―アマの根源波動――それは、＜ヒ＞という声音思念によって抽象し得る、ということ。又、そのことによって始めて潜象物理を、あらゆる現象（物質の発生や精神のイトナミもふくむ）の背後～あらゆる言葉の音声背後に、聞き分け感じわけることができる、ということに、はっきりと、ミの感受として、気づいたのだった。

＜ミ＞のむこうの＜ヒ＞の音そのものによって、私～存在がゆさぶられる、という体験。

アマ―カムのサトリとヒ・フ・ミ・ヨ・イとの関連。

アマ―カムのサトリによるゆさぶりからさらに、＜ヒ＞としての抽出～抽象からのゆさぶり、という、はじめての体験。

＜ヒ＞の感受――それによってはじめて、＜ミ＞の生命カン（感受性）の鍛練が、充分な根拠とイミ～チカラをもちうる。

・・・ということが、ミの感受として、ハッキリと分かった、にとどまらず、身体感覚・言語・宇宙・物質・精神のいとなみ・・・あらゆる領域の根本に、この感受（アマ―カム重合系潜象のハタラキ～チカラを、＜ヒ＞という声音思念として、抽象し転換～認識しうる感受力～波動量）が不可欠であることが、わかったということ。

＜ヒ＞

現象の背後には潜象があり、人の目には見えないその潜象過程のしくみを物理として解明している潜象物理――によれば、
我々は自分が歩く時、我々の足が動く前に、自分のミに、生命力（カムウツシ）が発動している過程がある、ということを、全く意識していない。
直観文明を生き、その達成の深さと根拠（原理－物理）を、図象文字として残しているカタカムナの上古代人は、
イノチのイが＜ヒ＞から発生するものであると感じ、そのイが生命活動をするには、その一つ一つに、＜ヒ＞からのカカワリ（アウノスベ）がある、と感じ、その＜ヒ＞からのカカワリの持続スルことが、イノチである、と感じたのである。

ヒとは、カタカムナの四十八のコトバ～声音の、最初・ハジマリ・であり、あらゆる現象（マ）の根源・カミ・（オク・上・カのミ）である、という思念である。

＜ヒ＞は、人間の目にはみえないチカラのヌシ存在であるから、＜カム＞といい、そのチカラが、我々の生命活動のチカラ（生命力）にウツ（賦与）されることを＜カムウツシ＞といい、それによって現実の生命体をつくり、生命活動に必要なエネルギーと物質を対向発生（アウノスベ）することを＜アマウツシ＞といったのである。

カムウツシ・アマウツシによって生命は持続（イカ）され、
マトモな（マノスベにかなった）生命活動には、生命力が天然供与（アウノスベ）される。

カムウツシとは、生命（カムミ）のチカラを直接うける（ウツス）ことであり、
アマウツシとは、アマ始元量の変遷物、（生体を構造している肉体を養うもの、栄養物質・水・空気・電気等のカタチを通して）の補給である。
カムウツシとはカムミ（生命のチカラ）を直接うけることであるが、それは＜チカラ＞であるから、直接病気を直したり悩みを去らせるものではない。
充分のカムウツシ（生命力の補給）によって、その場に必要なアマウツシが活性に、マットウになされるのである。

＜ヒ＞と＜ヒヒキ＞

＜ヒ＞の感受――それによってはじめて＜ミ＞の生命カン（感受性）の鍛練が、充分なアワのチカラ～根拠をもちうる。

人間のアタマは、宇宙生命（宇宙環境）に連動して働く。
「宇宙生命（宇宙環境）に連動して働く力」とは、環境のアマウツシ・カムウツシの波動にのせて、新しい生命（思想や創作物）を生み出すことのできる人間独自の「直感力」のこと。
宇宙環境＜オホマ＞と個体生命の＜アマナ＞との共振によって発生する人間独自の精神波動。

「抽象力」は、あらゆる生物が、生まれながらにもっている最も本能的な「生命カン」に基づくもので、抽象作用の全く無い生物は存在しない。

生物が生きて行く上に、生まれながらにそなわる生命保全の為の「判断力」とは「抽象する能力」――生命的な「感受性」（＜ミ＞の波動量）に直結している最も基本的な生物機能。
又、抽象力とは共振力。

生命カンは、無意識領域の潜象過程で働いている＜ミ＞の機能。
大脳作用は、五感をはじめとする内外環境の刺激に応じて、＜ミ＞の管轄のもとに働く＜イ＞の次元の、現象過程の機能である。
（感覚器官からの刺激が＜ミ＞に感受される時、生命カンによる取捨がなされている。）

「生命カン」（一般には生命力とか本能とかと呼ばれているものにあたる）の本質は、我々の個体内の＜ミ＞（アマナ）が、環境の波動の＜ミ＞（カムナ）と呼応することによって発揮される「共振作用」（ヒヒキアウ同期現象）のこと。それがとりもなおさず「抽象」（ヒヒキ）という潜象物理現象。

常に鍛練をつづけていないと忽ち＜ミ＞の機能は鈍化し、それに応じて＜イ＞の機能（大脳知能）も退化し、歪んで行く。

＜ミ＞の波動量とは、生まれながらのアワの量のこと。その潜在アワ量が開発されただけ、その人の＜ミ＞の波動量が増す。

＜アワ＞とは＜ヒ＞のチカラ、則ちアマ界にワされたカムの量のこと。

生物の「生命力」とは「抽象力」であり、それは潜象の＜ヒ＞を＜ヒキ＞する力である。

そしてそれは、実際には、波動的な共振現象（ヒヒキ）として、音波や電磁波以上の超高速（アマハヤミ）により、我々の無意識領域（ミ）の交流によりなされているもの。

あらゆる生物（人間も）が、その力（抽象力）によって生存していながらその過程は我々の意識には上がらぬものなのである。

五感以上の無意識領域～「生命カン」～潜象物理でいえばヒビキ、則ち抽象の作用。

＜生きている＞ということは、＜ヒ＞からの＜ヒキ＞によって共振波動（ヒビキ）をしていることである。

自らのミのアワの感受性を鍛えて、抽象能力（共振波動量）を増幅させること――潜象教育の基本。

感覚と感受ということ。

「感覚」という概念は、音・色・香・味・皮膚等の現象的な刺激に対応しているが、
「感受」には、その他に、「感受する側」と、
「感受される側」との間に、
交流している（受け渡しされている）＜何か＞がある、という思念がふくまれる。

この＜何か＞がなければ、そもそも個体の五感の機能も働きださない。

たとえ音や色などの感覚を通す場合も、個体側にそれを感受する＜何か＞がなければ、それを判断し、意識に上がらせることはできない。

この＜何か＞とは、五感の器官や中枢神経のことではない。
そのような組織がいかに完全に具っていても、もしこの＜何か＞が働かなければ、我々は「感受」も「判断」もできない。

そしてこの＜何か＞は、現象の色や音等だけではなく、潜象の波動（アマウツシ・カムウツシ）をも「感受」するものである。

我々の感覚と判断との間で働いているモノは何か？・・・・・・

それが＜ヒビキ＞（抽象）というハタラキ＝共振作用であり、とりも直さず、それは、＜生きている＞という事実を離れてあり得ぬものである。

＜生きている＞ということは、＜ヒ＞からの＜ヒキ＞によって、共振波動（ヒビキ）をしていることである。

その個体側の＜何か＞を＜アマナ＞とよび、いわば＜アマ＞の出先機関として個体の中に潜在するもの。（私の裡に、＜ヒ＞＜ヒキ＞された＜ヒ＞が＜アマナ＞として宿っているもの。）

脳のミのオクへオクへ、ヒへ、と発生～形成されるアワの振動波動量。

イノチ・ヒヒキ・直観

＜イノチ＞とは＜イ＞の持続であり、持続されるモノが五つの素量である。

則ち、＜カタカムナ＞の声音思念によれば、

＜ノ＞とは、ヒからヒキされたミが、次々と受けつがれて、発生を続け、トキ・トコロを得ていく状態をさすもの。

＜イノチ＞とは、『現象界に於いて、刻々に＜ミ＞をミ（身）につけて、則ちトキ（時）・トコロ（空間）を得て、＜イ＞として保ち続けること』という意味である。

そして、その＜ミ＞とは、三つの位相（イカツミ・マクミ・カラミ）をもつ潜態のマリ（素量）であり、＜イ＞とは、その＜ミ＞が、トキ・トコロのマリと結合した五つの素量からなるものである。（その＜イ＞の持続が＜イノチ＞である。）

そのイノチを保つ為にたえず交流されている微粒子を、彼らは＜ココロ＞と呼んだ。

カタカムナの人々は、このような、目に見えない＜イノチ＞の関わりを微波動的な共振作用（ヒビキ）として、体覚的に感受していた。

そしてそれは、宇宙のあらゆる現象事象の中に潜在し、個体側の＜ヒ＞（アマナ）として、刻々に環境の＜ヒ＞（カムナ）と共振（ヒビキ）していることを知っていた。

宇宙のあらゆるもののもたぬことのない、＜ヒ＞を＜ヒキ＞するチカラが、「抽象」（ヒヒキ）の作用（生物の同期性）であり、カタカムナ人は、それによって、天然宇宙の無限的な多種多様のヒビキを抽象して、四十八の声音に分類していた。

潜象の＜ヒビキ＞を感受し、ハッキリとした認識にまでもっていく、高度の判断力を、人間独自の抽象力、則ち「直観」とよぶ。（人間に許容された「感受性」と「抽象力」との共役による、現象追究のみでなく客観背後まで、則ち潜象側にまでひらいた、球感覚的な、「高度の判断」。～人類最高の精神現象。）

「抽象力」を鍛えることは、「直観力」を養うことであり、現代人の眠れる脳を覚ますことである。（↓高度の直観に基づく抽象文字によって記されている、カタカムナ文献）

民族の文化は、人々の直観の度によって決まる。

逆序のサトリ・サヌキ・アワ

逆序のサトリに基づく能力とは、（潜象への感受性を鍛練することによって）自分自身の感受性（ミ）を教え返して、自分の生命の波動量（アワ）を変える（向上させる）ことができる能力。

生命カンとは、生命の（サヌキ・アワのチカラの）潜在アワ量。「生命の感受性」。自分の生命の根源（又その方向軸）に共振する、生命本能。生命の基底波。カミ感覚。生命のカミ（ヒ）にむかう向上性。潜象カン。潜象にヒライタ球感覚。

生命のチカラの根源（本質）は、カムーアマであり、
我々の生命活動のチカラは、カムの「アワ」と、
アマの「サヌキ」であり、
「アワ」が、生命の根本。

潜象の「アワ」のチカラが生命力の基本であり、あらゆる生命活動は、その「アワ」からでるサヌキのチカラ。

我々が大マカに「生命力」といっているものは、生命体を保つサヌキのチカラ（アマウツシ）だけでなく、そのもとに、アワ（カムウツシ）のチカラがあったのである。

なぜなら、あらゆる生物は、カムアマ始元量の変遷物であるから、つねに、生命の根源に共振（感受）して、生命力の補給（ウツシ）を受けなければ、生存を保つことはできない。

生命体は、その根源からうつされるカムのチカラ（アワ）によって、生命活動（サヌキ）をいとなみ、生命体を維持している。

生命活動を実際にいとなんでいるのは、サヌキのチカラ。現代人はこのチカラしか知らなかったが、そのサヌキに、生命活動（あらゆる判断行為）をいとなませているのは、「アワ」のチカラである。
現代人は、この「サヌキ性」（アタマの判断行為のチカラ）を育てることしか考えず、アワ性（生命のカン・本能のチカラ）を育てることを知らない。生命力は、「サヌキ」だけでなく、「アワ」が基本であることを、認識していない。

「アワ」は、生命の感受性のチカラ。
我々の生命力（アワ）の感受性が、我々の生命の根源に共振する（カムウツシを感受する）ということがなければ、我々は、生命活動（サヌキ）を発動して生存を維持することはできない。

「アワ」は、カムのチカラであるから、自分自身のもっている基本的な生命のチカラであるにもかかわらず、感受性（生命カン）の劣化した現代人には、最もわかり難いもの、実際にそのチカラで生かされているのに、気がつかないものになってしまったのである。

人間は気がつかなくても、天然自然～カム・アマは、常に存在しハタラヒテイル。
自然の生物は、皆それを知って、（感受（アワ）を鍛え、その恵みを豊かに受けて）生きている。
人間の脳のみが、それを知らぬ（感受を失った）ために、種々の問題を引き起こし、現在の困った状態になってしまっている。
しかも、そのことに気がつかず、人間とはこういうものだと思っている。（脳の落とし穴）

現代人の感受性が著しく劣化し、現実の判断行為の為の機能（サヌキ）ばかり発達させてしまった為に、文化が古代人より進歩したように見えるが、実際は、根本を失った、（生命の感受性の麻痺した、）病的、癌化した状態になってしまっている。（脳の落とし穴）

その原因は、我々の感受性が感受すべきモノを、我々の脳が知らないまま、無理な生命活動をしているからである。

何としても、まず、自分の脳の落とし穴に気がつかなければならない。

転換～＜悔い改め＞というのであれば、脳の観念（大脳（イ）次元の陶酔）で満足するレベルをこそ、さらに転換～ク＜ヒ＞アラタメ、
刻々に、＜ヒ＞の＜ミ＞の＜アワ＞の感受を自らの内に、発生～ヨミカヘラスものでなければ、
人類の自滅の加速度をゆるめたり、厳しい天然の淘汰からまぬがれたり、
まして根本的に転換（逆序のサトリの実践）することは、出来ない。

アタマで理解して、わかった気になるのではなく、自分自身の感受性の共振によって、自らの生命の根源を感受することができなければならない。

アワのヒラメキを入れる――アワの感受性～潜象カン～直観～の鍛練

ミえないオクでハタラヒテイルチカラ・ミえないオクでナサレているハタラキ、の受け方・感受の深さ、が問われている。

それが、マにおける、カムからウツされるアワのチカラへの、生命の感受性。

又、様々の心身治癒～鍛練法の本質――カムウツシ・アマウツシの発生する場をつくる――にもかかわる。

よい判断行為を出すにはサヌキのチカラを鍛えるだけではなく、アワの感受性を鍛えなければならない。

刻々のイノチの発生～行為にともなう、かろやかなアワの微調整・微チェックのバランス感応（感能）・刻々の微波動バランス・刻々のかろやかな、目にみえないアクセルとブレーキ能。

ヒのアワの感受があってはじめてフのサヌキ・アワのフトマニをミに実感～実現しうる。

環境のヒ（アマ―カム）にヒビク、アワの感受性。

環境のヒからウツされ、又、環境のヒにウツして、自ずとチェックが入る、アワの潜象カン。

「注意して」「気をつけて」「意識して」というのは、脳からのサヌキのチカラであり、アワの感受性鍛練ではない。

脳で、どんなに意識し、注意しようと気をつけているつもりでも、我々は思わぬところで、ころんだり、けがをしたり、病んだり、・・・思いがけない目にあう。

それを防ぐには、「注意」や「意識」や「気」のような脳の指令を出させるモトの、アワ（感受性）を、つねに、活性に鍛えていなければ、不可能である。

人間は、なまじ進化した脳があるために、何をするにも、アワが感受して、脳に指令を出させる前に、いち早く、脳からサヌキを出すクセがつき、感受性のチカラを著しく劣化させてしまったのである。

その為に、現代人は、進化した脳の「落とし穴」に陥り、自然の生物が皆知っている「アワ」を、最もわからないものにしてしまったのである。

何をするにも、その時の自分の状態（アワ）をよく見てする、ということが、その状態を活性（アワ ヒラメキ）にして、感受性を鍛えたことになる。

つねに、何をするか、何を食べるか、何を話すか、様々の「サヌキ」をだしている自分自身の内身の生命活動の状態（内蔵や筋肉や脳や脈や呼吸等の全身の状態）をありのままに感じとることが、感受性の鍛練になるのである。

といっても、それは全身の感受性を緊張させることではない。

感受性の鍛練は、むしろそういうサヌキの緊張を解いて、（無駄な力を抜いて、）感受性が本来の生命活動の状態（アワのココロ・態度）に、スナホになることである。

本来我々の生命は、よりよく生きる方向性を天然的に給与されているから、その生命力に、スナホにまかせる態度になれば、内身に何らかの異常な変化（差）が起きれば、おのずから感じとることができる。

それ故、感受性の鍛練とは、無駄なサヌキをださず、スナホなアワの態度になることである。

といっても、出てくるサヌキを、出るな、と、意志（サヌキ）で止めても、止まるものではない。

そのサヌキを出しているモトの、アワのチカラの方を強（キタエ）くして、（ヒラメキを入れて、）カタカムナのヒに照らす～ウツす状態になることが、感受性の鍛練になるのである。

ヒラメキを入れるとは、
全身体も脳も、ヒラク～ユルメル方向にムカヒ、
すなわち、それによるカムウツシの注入～対向発生。

ヒトツヒトツのシグサ・フルマヒのマに、マエに、カトに、アトに、タヘズ、オノズト、ヒラメキをイレル～ハヒル。

脳天から　脳髄から　脳幹から　脊髄から　喉から　クビから　胸から　腹から　丹田から
ホトから　股関節から　モモから　ヒザから　アシクビから　アシウラノツチフマズから　カタから　ウデから　テクビから　指先から
すべてを　ヒラ（メ）キ、ユルメ、
の方向へムカヒ、カムウツシの対向発生にマカセ、ユダネル。そのオトヅレ～ヒビキを感受する。

＜アワ＞は、＜カムウツシ＞を感受する生命のチカラである。

鍛練というとサヌキ的なやり方のように誤解しがちであるが、
何をするにも、自分の感受性と判断力を使い放しで流してしまうのでなく、何をしていても、
又、何を感じても、その時それをしている、又それを感じている自分の感受性の状態を、カタカムナのヒに照らしながら～ウツしながら省る（感じとる）、ということであり、それは、＜感受性の鍛練＞（アワ）である。

＜アワ＞は、我々が何をするにも、実際に、いつも、本来そこにある、基本的な生命のチカラであるから、その瞬間、パッとヒラメキを入れて、又はジッとそこに思念を入れて、その生命力を起励してやれば、鍛えられたことになるのである。

カタカムナがわかることの根本は、アワがわかるということである。

自分自身の感受性の状態を知らず（無視して）、好みにふけって（一方的に流して）生きていたものが、自分の内身のオクの声（アワ・ヒビキ）に気がつき、＜イ＞（サヌキ）と＜ミ＞（アワ）を感じ分けることができるようになる、ということである。
すなわち、自分の感受性が、生命のヨロコブ（向上する）方向へ、判断行為を出すスベがわかる、ということである。
（何をするにも、自分のアワを養い＝感受性の鍛練、よいサヌキを出すという、生物として最もアタリマエの生き方が、ミについてくる。）

カタカムナの文化の本質は、
子供の育て方、教え方からして、現代人のように、サヌキ（脳～アタマのイの次元の能力）を鍛え、サヌキの（欲望の）満足を目ざすものではなく、
サヌキをだすモト（ヒ）のアワの物理（潜象物理）を知り、何ごとにも、アワを養い鍛え高める生き方を、確立していた。

今までの様々の宗教者・思想家・賢者たちは、自らは様々な形をとった天与の才によってアワ量を増していても、物理としてアワのことを知ってはいなかったから、現実に判断行為を出すサヌキのことしか考えず、難行苦行的な、サヌキを鍛える方法をとるしか無かった。サヌキをだすモトのアワをヤシナヒ、キタヘ、タカメ、おのずから転換をきたす～おのずと低次の判断行為を出さなくなる、というスベ（物理と根拠）を知らず、その断崖に、自他を苦しめることとなった。

繰り返すが、アワの鍛練は、「アワを起励すること」であって、
「よく注意して」とか「一生懸命気をつけて」というようなサヌキの鍛練ではない。

感受性（アワ）はうわの空で、もっぱら脳（サヌキ）の意向で判断行為をだす、というようなことではない。

人間は、食べ物はもとより、万事に、感受性（アワ）はうわの空で、脳（サヌキ）の力が支配的である。
我々は、生物のアタリマエの行き方を失い、アワの力を鍛えることを忘れ、サヌキの力をふりしぼることしか知らなかった。
そして、それが人間というものだと、思いこんでいた。

人間の脳が進化したために、我々は、自分の脳に支配され（脳の下克上）生物のアタリマエの感受性を失い、サヌキ的な感情（欲望の満足感や欠乏感）しか知らず、生命（アワ）の充足感（すこやかな、スナホな、かろやかな、おだやかな、やさしい、微波動次元の感受）を、無くしてしまったのである。

人間は、進化した脳があっても、アワをマットウに鍛え続けていれば、脳は邪魔をせず、マノスベ～ただしいサヌキを出す為に働くチカラになってくれる。（人間のあるべきスガタ）

カタカムナ～潜象物理の勉強・実習とは、
このアワの心を養い鍛え、アワの生命カンのタカマリを生命（イノチ）がよろこぶ生き方を、続けること。（欲望や陶酔・観念の満足にとどまるのでは、意味がない。）

序＝断片的ヴィジョン（13）から（14）における期間（マ）の意味は、＜私＞にとって、この潜象のヒ、アワを感受し、はっきりと認識に出すことにより、潜象からの発生のシクミ（潜象過渡への感受性をヤシナヒツツ）を、本当に感受し、ミにつけ、他者に伝え得るレベルにまでタカメ、ヒラキ、ヒラメキ、オコナヒウルための不可欠の実習にあった。
（このことは、この号の作成過程そのものにおいて、いっそう、そうである。）

自然の動物は、生命の要請（生命力・カムウツシの発動）なしに、行動することはない。

人間のみが、脳が進化した為に、生命の要請によらなくても、大脳次元での欲求によって、いくらでも、判断行為を発することができる。（逆序の能力）

（しかし、逆序の行動には生命力・カムウツシの天然給与は無い。）

この逆序の能力が、人類の特徴であり、他の動物に無い人類の文化をつくりあげた原因であるが、しかしその為に、様々の病を起こし、心身を癌化させ、（ヒの心臓を過労させ、）結局、生命を亡ぼす原因にもなったのである。

最大の問題は、人間が、進化した脳にふりまわされる（虐使される）ばかりで、脳の能力の限界を自覚しない（気がついていない）ことである。

（ここでも、逆序の能力をもちながら、逆序のサトリが無い。）

動物たちは、生命活動の順序（マノスベ）をマ違うことはない。

人間は、脳の下克上の為に、生命活動の順序を忘れ、生命の本能を失い、生命の要請（カムウツシの天然給与）なしに、脳の欲望の満足（生活の文化）を求めて、心身を消耗している。

何をするにも、一挙手一投足に、一つ一つ思念を入れること（アワの鍛練）。

即ち、イマ、手をあげよう、イマ、足をあげようという生命（ミ）からの要請（シゲキ）のところに、思念を入れること。それは、とりもなおさず、その時の生きるチカラを発動させる（その生命活動を順序にして、カムウツシを促進する）ことになる。

思念を入れるというと、意識を入れることと、マ違う者がある。

意識を入れるのは、脳の（判断力の）イの次元である。

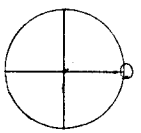
思念を入れるのは、感受性のミを入れることである。

ミとは、生命力のアワのチカラである。

なぜ?というスナホな、幼児〜子供であれば持つトヒに、その真の求めにヒビキ、即したコタへを用意したモノは、かって無かった。潜象物理によるアワのミの鍛練方法を除いては。

我々は、ヒを養うスベ（ヤシナヒ）を知らなければ、生命を全うすることはできない。（自らの生命の本質を感受し生かし切ることが出来ない。）

ヒが生命力の実質（アワ）であり、
カムウツシの実質は、アワであり、
ヒを養うものは、カムウツシである。
（カタカムナの図象にあらわしてみると、カもアワもヒもサカも同じ図象で表現される。さらに、ヒカリ・カヒ・アトヒ・・・等も、すべて共通である。）（→後出）



ヒカアレ　ワカリヒヒタ
アサヒカ　トヒ
カ　・・・

ヒフミヨイのミとイの意味がわからなければ、思念を入れて順序の鍛練をする意味がわからないから、本当の感受性鍛練（生命のヒを養うスベ）はできない。

脳の指令によって行うのは、逆序の練習ではあっても、まだ、本当の感受性の鍛練ではない。生命活動の「順序」（生命・ミ・の要請によって生命力がカムウツシ発動し、それによって行動する）では無いからである。

アタマの指令だけでミの方はウワの空でやらずに、思念を入れて、順序・マノスベにして、生命力の発動カムウツシをよび、生命の前駆過程に思念をおいて。

人間は、ミからの要請が無くても、脳の指令だけで、（逆序の能力があるから、）いくらでも行動できるが、順序・マノスベでなければ、（ミを入れなければ、）生命力・カムウツシが発動しないから、手持ちの生命力を消耗するばかりで、マ違いや失敗が多いのである。

思念を入れるということは、脳の感受性（生命の要請の過程）に共振波動を加える（加圧する）ことであり、放っておけば、高度に進化した脳が下克上して、（ミの要請なしに、欲望満足の情動のままに、好みにふけったり、アワ量の少ないサヌキの自我の判断行為を行ったり、）極限まで回転してやまぬものであるから、それに制御棒を入れて、生命の破綻を防ぐことになるのである。

思念をいれるのに時間はいらない。

・
・
・

ヨーガや気功、太極拳、手当てや指圧、操体、念力等も、そうすることによって、生命力（カムウツシ・アマウツシ）の発生する場をつくっているのである。

生命力（カムウツシされる生命の根元・ヒ・のチカラ、則ちアワの性～チカラ）が、マノスベに働くよう、感受性を鍛練する。

肉体的にも精神的にも、つねに、何をするにも、アワの心（ミ）で受け、アワの心（チカラ）でサヌキを出すように、（何をするにも、つねに、ヒラメキを入れて、ミを入れて、相手のミになって、思念を入れて）ということが、自分の感受性（アワ）を鍛えることになるのである。（ヒを養うスベ）

イを入れる過程、更にそれをヌヒテ、マノスベの順序（アワのミ）にカヘシテ、行動をウツス過程。

則ち、感受性鍛練の様々な実習の際、脳（イ）の指令によって（逆序で）行動するわけであるが、その時、我々の手足（ミ）は、脳の指令だけで直ちに動作をするのではなく、その手足（ミ）に、順序の思念を入れるのである。

ということは、頭（イ）からの指令で、すぐに手足の動作を出さず、その前に、（逆序からの指令を、ミからの順序のすじに直して、マノスベの判断行為が出せるように、）生命（ミ）からの要請を入れることになるのである。

つまり、思念を入れるということは、生命（ミ）からの要請、則ち、生命活動の発動を刺激して、生命力の発生（イキココロのカムウツシ）を促進することになる。

肉体的な生命活動はもとより、精神活動についても、全く同様。

何を考えるにも、大脳の（欲望次元の）回転に任せきりにせず、つねに、ミからの順序（マノスベ）に照らして（ヒラメキ・思念を入れて）考えるというやり方のクセ（行き方）を、感受性（ミ）につけることである。

何をするにも何を話すにも、何を考えるにも、つねに、脳の妄動にまかせず、その内心（ミ）のスキに、マに、ヒラメキを入れて（アワの波動を入れて）コトバや行為を出す、という生き方のクセをミにつけることである。（ヒを養うスベ）

日本語の「キをつけて」ということの本当の意味は、単に外のことに注意するだけでなく、その、注意する（サヌキを出す）もとの、自分自身の内なるアワの気持ちをしっかりと入れて（ヒのアワのミのココロをつけて）、注意してよいサヌキを出せ、という意味だったのである。

潜象物理は、それを知識として知ればよいものではない。

対向発生（ムカヒ）の物理を知れば、自分自身が自由に対向発生できなければ、意味がない。アマウツシ・カムウツシの物理を知れば、実際に、自分自身が、自由にアマウツシ・カムウツシを受けて、心身を活性にし、マノスベのイノチを実践できなければ、サトリではない。

（オウムの問題も、現代のあらゆる問題も、＜潜象＞への感受（性）と認識の深さ（欠如の覚醒）から対象化されない限り、現象の現象的解釈におわり、根本的な解明にはならない。）

マノスベ――照らすもの

生命本能の基底波を植え付け、育て、養う潜象教育の必要性。

本能は、生まれてすぐ教え育てなければ（マトモに刺激されなければ）ミにつかない。（ミツゴノタマシヒ）

脳の機能が向上的に働くことができるためには、脳が、生命の本能（基底波）を強くもっていなければならない。

また、脳が向上的な生命の本能（感受し、つきつめ、つきとめる、イノチのチカラ）をもっていても、「照らすもの」が無ければ、マトモにつきつめつきとめることはできない。（波動量を向上させることはできない。）

天才は、天然自然のスガタから、自力で「照らすもの」を自得できるが、その根拠としくみを解明し他者に伝えることはできない。

凡人は、生命の基底波が育てきたえられてさえいれば（知識や才能はなくても）、教えてもらえば、＜わかる＞ことができる。

いずれの課題も、潜象物理によってはじめて解明され得た。

「照らすもの」――マノスベとは何か？

直訳すれば、《天然カムから発生したマの進行方向（スヘ）である。》

＜マ＞　＜ノ＞　＜ス＞　＜ヘ＞　という一音一音のコトバの声音思念がわからなければ、又それらの発生する根拠の、カム－アマの物理がわからなければ、「マノスベ」の意味はわからない、としても、人間のアタマが作り出す観念ではなく、天然自然のスガタや自然のイキモノの生き方のような、「生命をよりよく生かす方向」というカン。

自然の生物は、精一杯、生命の力をよりよく発揮して、たしかに「マノスベ」に生きている。

そして、そのスガタというものは、自然の様相に、おだやかな美しい風景のトキと、激しい嵐や地震・噴火のような荒々しいトキがあるように、生物の生きざま（マノスベ）にも、イヤシロ（活性・幸福・長寿・・・）と、ケカレ（衰弱・病・死・・・）がある。

――マノスベにも、正・反あるということである。

自然の生物は、その正・反のマノスベのままに、生きて、死んでゆく。

自然の生物たちが、環境にマノスベに対応して、豊かに感受している生命のカカワリ（カム・アマ）の存在を、カタカムナの上古代人はつきつめ、マノスベの根拠を知った。

そしてアマウツシ・カムウツシの物理を示している。

現代人は、様々な知識、情報を詰め込んで生きているが、肝心の、自身の、生命体としての感受性を忘れている。

自分の生命体（カラダ）が、どんな微細な単位で、大変なハタラキをしているか。そしてそれぞれが、どんなにうまく協力して、平衡を保っているか。

痛みや、いい気持ちや、イヤな気分・・・を感じるのは、どこが、どうして、どうなっているのか。

我々は、自分の生命体（カラダ）を、どのように働かせばよいか？

これらのことを、知識としてではなく、刻々のミの感受として、感受し得ることが、ぜひ、必要である。

自分のカラダの生き方を、（立ち方、歩き方、座り方、眠り方、食べ方、出し方、呼吸のしかた、洗い方、休み方、そして考え方を、）どのようにしたらケカレ（衰弱し、病気になり、争いとして現象し）、どのようにしたら活性（創造的、元気、平和）になるのか？

その実際のヤリカタを、ミに感受させること。

マノスベの正・反をわかり、自らをオシエカヘシ、逆序を順序にカヘシテ（逆序のサトリ）、天然自然の反に流されることなく、しかもマノスベの順序を冒涜することのない生き方。

ヒビキ　ということ。

人間をふくむあらゆる生物の感受性が、何よりも「感受」しなければならぬモノは、「宇宙のあらゆる生命現象を発現する根源」の共振波動（ヒビキ）である。

我々の生命活動がよい場をつくれば、そのヒビキが発生する。（対向発生）

五感・六感等といわれる感覚機能も、究極的な目的は、ソレを「感受」する為であり、目も耳も鼻も舌も全身の神経系統も、その為である。

我々は、ソレの「感受」（共振）によって、生命のエネルギー（アマウツシ・カムウツシ）を得て、生かされている。（生命力の天然給与）

したがつて、「感受」したものを判断する役割の「大脳機能」が、何よりもその判断をマ違えてはならないモノも、その「宇宙のあらゆる生命現象を発現する根源」と個体生命との、物理的な共振作用によって、個体に発生している（生かされている）ソレのチカラである。

自分たちの生命が、真に求めているモノは、何であるか。
それを知り、それを「感受」する「生命感覚」を人々は失い、マトモな生命感覚（生命カン）を失った人々の脳は、人類に許容された波動量まで鍛練向上することができなくなり、そのような人々の脳の作り出す判断行為は、現代のようなレベルの文化を作るしかなかったのである。

ヒの根源波動への感受力＝ヒの生命カン。

我々がうしなったのは、感覚器官をして「感受」させている生命のヌシ（脳のアマナ）の、根源的な感覚。視えないオクでハタラク根源的なチカラを感受するチカラ。

この「生命カン」が退化し、生物の本源（マトモサ）を失ったために、大脳判断に狂いを生じたということ。

その生命カンを、生物普遍の、カムーアマに感応する個体生命の「基底波」の共振作用（ヒビキ）とよび、本来、生物の発生時（ミツゴノタマシヒ）に、母子の間でウツシ伝えられるべきモノであり、それなしに、あらゆる生物は、生存を全うすることのできない、最も根源的な生命保持の条件。

いくつかの理由によって、＜私＞自身は、＜医者＞にかかるとかその治療を受けるといったことが困難な条件下に生きてきたため、この条件を生かし逆用して、様々の身体感覚～精神感覚のヨミガヘリ～発生を、自らの心身に＜実験（キ）＞している。

《この空間を切り裂いてその向こうへ》は、宇宙環境との対応において、日々刻々のあらゆる行為・判断・一挙手・一投足・一呼吸・一音・一語・一思念・・・を通じてこそ、試されている。

生命の基底波に移しつたえらるべき「生命カン」は、人間以外のあらゆる生物は、決して失ったことのないものであり、現人類のみが、大脳知能のなまじっかな偏った発達にかまけて、無きに等しく劣化させてしまったものである。
ソレがなければ生存を全うするチカラを失うものである為に、人間以外の生物は決して忘れることのないこの「生命感覚」を、人間のみが、近代化の進んだ社会になるほど、親から子に移し植えるべき生命カンのイトナミを、欠落してしまった。

たとえ肉体的五感が健全であっても、その「感覚」を、まともに「感受」させる生命のヌシ（生命の基底波の共振能力（生命カン））がしっかりしていないと、それを判断する立場の大脳知能がマットウに働くことができない。
その為に、感受のないことを考えたり言ったり行ったり、脳の自己回転に任せてや我執観念にすぎないものを振り回したり、宗教的神秘思想、哲学的・科学的神秘思想に墮してしまうからである。

オサナゴのトヒのココロ――生命はどこへむかっているか。
生命の根源にヒビキ、感受したいという生命カン。
生きるのもそこへムカヒ、死ぬのもそこへカヘル、生命の向上カン。カミ感覚。又、生命力の（アマ・カム～サヌキ・アワのチカラの）潜在アワ量。
生物は、その「生命カン」（生命のアワ）をマットウにきたえつづけていなければ、生存を全うすることはできない。

「カタカムナ」とは、生命の根源は「カム」（アワ）であることを示す、カタカムナ人のイノチノコトバである。
（生命のチカラの根源は、カム－アマ始元量であり、生命活動のチカラは、カムの＜アワ＞とアマの＜サヌキ＞であり、＜アワ＞が、生命の根本であることをしめしている。）

カタカムナの思念を学んで行くと、＜ヒ＞には、すべての根元（モト）という思念があり、その宇宙の万物万象の根源を、カタカムナ人は、＜カ＞という思念で感受していた。
（＜カ＞が万物万象のすべての＜ヒ＞という思念である。）

潜象の＜カ＞のカカワリを感受することが、感受性の役割であり、生命カン・潜象カン・といわれるものである。

フタツの＜カ＞（潜象）が重合（ト）した最初のカタチを、＜ヒ＞として、現象の粒子の発生のはじまりの物理を示している。

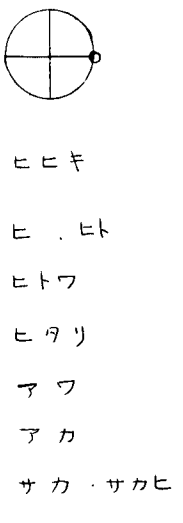
生命のチカラは、カム－アワからうつされるアワとサヌキであり、
則ち、感受する生命のチカラ（アワ）と
　感受に基づいて判断行為をだすチカラ（サヌキ）
によって、いかされている。

我々の生命力（生命活動をする命のチカラ、則ち、「イノチ」や「こころ」といっているもの）は、感受性（アワ）と判断力（サヌキ）のチカラに分けられるが、アワとサヌキのチカラは、別々に働くのではなく、同時的に働き合うものである。
生命活動はすべて、サヌキとアワの互換重合（フトマニ）、則ちサヌキとアワのチカラが換わりあい、カムと重合することによって、無意識のうちに、なされるものである。

潜象と現象が重合して新しい生命を発生する際の、現実の個々の生命に直接カカワル潜象の存在、則ちチカラの個々のヌシを＜カムナ＞という。
それは、＜カム＞の代行者であり、＜カム＞の微分量であり、繰り返し、繰り返し、極めて微細な微分系でカカワルモノである故に、＜カム＞の＜ナ＞則ち＜カムナ＞という名でよばれるわけである。

それに対し、個々の現象物の側にあって、それを受けとるものを＜アマナ＞という。
＜アマナ＞は、＜アマ＞の＜ナ＞則ち＜アマ＞の名代として、現象物質の中に確かに存在し、＜カム＞のチカラの受け渡しをする主体でありながら、そして極めて濃密に凝集していながら、その形態は、人間の目には見えぬ潜態のモノであると、カタカムナ人は感受していた。

そして、＜ヒビキ＞とは、この＜カムナ＞の＜ヒ＞と、＜アマナ＞の＜ヒ＞との重合によって、新しい生命の発生や変換（元素の転換のみでなく、細胞やエネルギーの変換や代謝の現象）も、発現される（キ）、という巨察を示す上古代語であった。（→ヒビキ図象）



＜ヒビキ＞――――＜ヒ＞から＜ヒキ＞すること、則ち「抽象」ということ。
カムの＜ヒ＞からアマの＜ヒ＞が発生（キ）し、カムの＜ヒ＞の＜カムナ＞とアマの＜ヒ＞の＜アマナ＞とのフタツのヒとヒの対向（ムカヒ）によって、宇宙のあらゆる生命～万物万象が＜ヒキ＞出される（発生される）、という、あらゆる響のもと、則ち生命発生の起源の、元（ヒ）・次元（ヒキ）関連のサトリ。

要するに、アマ（宇宙球）は、カムから抽（ヒ）き出（キ）されて次々と移り変わって行く。（音波が響となって伝わることだけがヒビキではない。）
したがって、宇宙のあらゆる現象事象は、いかに複雑多岐な多種多様の異なった形態を示していても、すべて、カムのナリ（性）とアマのタチ（質）を受けて生成されないものは一つも無いのであるから、その本質本性をつきつめれば（抽象すれば）、カムの＜ヒ＞と、アマの＜ヒ＞の＜ヒヒキ＞であることに帰着してしまう。――――このことを最も端的に、潜象物理用語として示したのが、＜ヒビキ＞というコトバとその図象符なのである。

カタカムナ文献第一首

カタカムナ　ヒヒキ　マノスヘシ　アシアトウアン　ウツシマツル　カタカムナ　ウタヒ

カ（無限量カムのチカラから）タ（独立的に離れたもの、それは）カムナ（とよばれ、カムのチカラの＜ナ＞したモノ、則ちカムの微分量であり、カムの代行者（ナ）として現象界にカカワルモノであるが、自分はあくまで潜態（ム）である。それが、現象系の万物万象の）　ヒ（根源となり、そのヒによってカムのチカラが次々とヒかれてアマの）ヒ（となる。その「カムのヒ」（のカムナ）と、「アマのヒ」（のアマナ）との、フタツのヒとヒの対向（ムカヒ）によって、宇宙のあらゆる生命（ヒビキ）が、）　キ（発生されるのである）。それが、マ（アマ宇宙球に於いて、）ノ（様々な変遷のスガタ・カタチをもちながら）ス（極限・飽和・安定するまで進行し、）へ（現象の四相の形態をとり、方向性をもつ力として）シ（示されているのである。）

「カタカムナ」とは、生命の根源は、「カム」であることを示す、カタカムナ人の生命の情報である。

しかし、「カタカムナ」とはなにか？ということは、アタマの理解だけでなく、自分自身の感受性を養い鍛えて、ミの感受（生命の根源への感受性の共振）によってわかるのでなければ、わかることにはならない。

「カタカムナ」とは、「カからタしたカムナ」、「カからタする」とは、ヒ（根源）からヒキ（抽きだされて発生）すること。「カムナ」とは、「カムのナ」則ち、カムのチカラが、実際に、現象にカカワル時のカムの実質をいう。

フトマニ

カム一般のなかからヤでタしてノしたカは、現象の生命体（ミコト）のアマナのカとなる。
（それは、我々の生命体のアワのチカラ＝生命力であり、感受性のチカラである。）（第七首）

潜象であれ現象であれ、物質であれ思想であれ、何であっても、マトモに発現するものは、ヤでタ（出る）わけである。
（もしヤにならずにムリして出れば、癌や奇形になり、ムリに出てみても、やがてムナシく崩壊してしまう。）

現象の生命体（人間をはじめ、あらゆる生物）の生命力は、
ヤタノカのアワと、
アワからでるサヌキのチカラの、
フト（重合）の対向発生によって、「フトマニ」に発現（ニ）されるのである。

我々の生命活動（衣食住の生活のイトナミ、思想・宗教・科学・芸術・経済・運動・性―殖等の文化のイトナミ）は、すべて、アワとサヌキの対向発生の相似象である。

「フトマニ」という言葉は、神道などで、神秘思想で使われているが、カタカムナ人の思念した意味を、先入観にとらわれることなく、スナホに感受してみると、
《カムとアマのフタツのチカラの重合（ト）によって、現実の生命（マ）が発現し、「フトマニ」として定着的に持続される（ニ）》
という、カタカムナの潜象物理の基本を示すコトバであったことが、わかってくる。

＜ニ＞とは、その存在が定着的になる思念であるが、「フトマニ　ニ」と、＜ニ＞がくりかえされているのは、フトタマ（潜象過渡のタマ）のミが、夥しいくりかえし（コト）によって、＜ミコト＞（生命の実質）となり、カムウツシ・アマウツシの＜フト＞によって、現象物質の生命体（フトマニ）として、定着的に存在する、という意味の＜ニ＞である。

カムアマ始元量のフト（重合）した微粒子（フトマリ）が、原子・電子や遺伝子等の現象に定着するまでの潜象過渡の物理が、科学にはまだ無いが、カタカムナ人は、物質、生命質、精神現象もこめて、あらゆる現象が、潜象から発生する、その根源の潜象の存在をつきとめ、潜象から現象に現れる潜象過渡の物理を、解明（直観）していたのである。

カタカムナ人がフトといえば、

カムとアマのフト

アワとサヌキのフト　であり、

「フトタマ」とは、「フタツの重合（ト）のタマ」、

「フタツの重合」とは、フタツの＜カ＞、則ち、

カムからタした＜カ＞と、

アマの＜ミ＞になる＜カ＞との重合（ト）である。（カタカムナ文献第三首　フトタマノ　ミ

ミコト　フトマニ　ニ）

則ち、ここは、ヤタのカカミの「カムナ」（カム〜アワのチカラ）と

カムから発生したヒフミのミの「アマナ」（アマ〜サヌキのチカラ）

のフトを示している。

カムとアマ（アワとサヌキ）のフトによって発生したモノを「フトタマ」という。

（最初の左旋の＜カ＞（アワ）と右旋の＜カ＞（サヌキ）の重合（ト）したモノ（マリ）を、

＜ヒ＞とよぶ。

＜ヒ＞は最初の＜フトタマ＞であり、＜フトマリ＞ともいう。

この＜フト＞（正反対向）の物理は、＜アワ＞と＜サヌキ＞が対向してから、＜カ＞が発生す

るのではなく、＜カ＞が発生してから＜アワ＞と＜サヌキ＞が＜重合＞するのでも無い。

アワとサヌキの＜フト＞（互換重合）と＜カ＞の発生は、同時（アマハヤミ）であるから、＜

フトマニ＞（対向発生）というのである。

カタカムナ人は、＜カ＞という潜象の存在を発見し、＜カ＞が現象粒子を発現する＜フト＞の

チカラをもっている、という物理を開発した。

潜象から現象が発現する、生命発生の根本原理である。

我々の生命体（ミ・コ・ト）は、このカム（アワ）と、アマ（サヌキ）の、フタツのチカラの重合（ト）によって発生した＜ミ＞の繰り返し重合されたモノ（ミコト）である、という、生命発生と生命活動の物理である。

則ち、我々の生命体は、カムアマ始元量（フトタマ）の変遷物（ノ　ミ　ミコト）であるから、そのチカラ（生命力）の根源はカムであり、我々の生命の根本は、カムのチカラ（則ち、アワ）であり、絶えず（イマイマに）カム（環境・オホマ）から、対向発生（フトマニ）によって、補給（ウツシ）されている。

我々の（生物の）生命体は、
このカムのウツシを受ける能力（感受性＝アワのチカラ）と、
感受したものを判断し行為する能力（脳の判断行為力＝サヌキのチカラ）
とで、生かされているので、つねに、この感受性（アワのチカラ）をマトモにキタエて（充分なカムウツシを受けて）いなければ、マトモな判断行為（サヌキ）を出して生きることが、できないわけである。

つまり、我々の生命力の基本はアワであり、我々の生命活動（サヌキ）は、そのアワの量（だけのアマウツシ）によって、いとなまれるものである。（カタカムナ文献八十首のウタヒは、この生命物理（マノスベシ）を示すものである。）

感受性～直観鍛練

五感の身体的な感受性を鍛えることは、とりも直さず、脳の感受性（直観）の鍛練向上に、直結して運動する。

直観を鍛える、ということは、感受性を鍛えること、則ち、アワのチカラ（生命力）を高めることである。

脳の落とし穴に陥ることなく、（先入見や感情・経験・記憶・欲望・勝手な連想・陶酔・我執・脅迫感・・・等によって勝手な判断行為を出すことなく、則ち、脳の自己回転にまかせて感受の無い判断行為をすることなく、）
内外環境の刺激（カカワリ）や変化を、五感（眼耳鼻舌身）の感覚器官によって鋭敏にとらえて（ウツシ）、正しく脳に感受させ、その感受に基づいて、（マノスベに照らして）判断行為を出させる、ということである。

要するに、直観を鍛えるということは、感受性を鍛えることであり、
感受性を鍛えるということは、アワ性を鍛えることであり、
アワ性とは、生命力の＜カ＞のチカラである。

感受性の鍛練とは、その生命力（のサヌキ・アワのハタラキ）が、＜ヤタノカ＞（天然給与の＜カ＞）を発生させる場を感受（ワカル）ことである。

（この、アワのチカラの意味や方向性をハッキリと自覚できないとき、感受性の強いアワ型人間は、そのアワを巻いて、苦しむこととなる。このことの意味をハッキリととりだして、アワのチカラ（生命力）を鍛え高める発想～教育が現代には無い。このことこそ、人類史上のあらゆる思想・実践のもつ、決定的な欠損。）

（するか、しないか、といった二律背反からはみだす～あるいは、してもしなくても、存在がかかえる宙吊り感覚――この宙づりの存在的根拠をとらえわかることなしには、一切は空しいではないか。たとえどのように、すること、又は、しないことを、自己選択し、あるいは関係性から強いられているようにみえる場合にも。）

（＊存在の宙吊りの根拠を対象化しうるコトバをもつことなくしては――。＊宙吊りに耐え得る対象化のコトバの相互的～関係的欠損）

身体の生命活動が、カとミ（サヌキとアワ）の対向発生（フトマニ）によって、イマイマの生命が発生するように、脳の生命活動（精神作用）も、感受性（アワ）と判断力（サヌキ）の互換重合の対向発生の積み上げによって、新しい思想（カ）が発生する。

それが、精神の新しい生命（成長）であり、ひらめきとか、インスピレーションとか、高度の直観といわれるものの発生も、このフトマニの物理に他ならない。

いかに前頭葉の智識的な経験の能力を鍛えたとしても、思想は高まらない。

新しいカの発生する場がつくれなければ、つまり、精神作用（サンカーラー）のサヌキとアワの互換重合（ハタラキアヒ）の、よい対向発生の場（ヤタノカ）ができなければ、高度の直観は発揮されず、ひらめきもインスピレーションも独創も、発生することは無い、ということである。

それ故、つねに感受性（アワ）を鍛えて、脳（サヌキ）が、マノスベの判断行為を出すために働いていて、その上に、サヌキとアワの対向発生（フトマニ）の場がつくられれば、新しい直観の＜カ＞が、天然的に、瞬時に（アマハヤミ）、発生するわけである。

感受性の（サヌキ・アワのチカラの）鍛練の蓄積の上に、新たな生命のヘカ＞（カムウツシ）の発生の場（より高度なサヌキ・アワの対向発生の場）が出来たとき、新たな発見・未到の表現～転換・・・等が、（固有の個人の能力ではなく）もたらされる。

なにごとであれ、すべて、生命活動は、決して現象のチカラだけで為されるものではない。必ず潜象（アワ）との対向発生（フトマニ）が無ければ、持続されることは無い。

楢崎皐月が、「互換重合・対向発生」と訳したカタカムナの「フトマニ」のサトリは、生物の生命現象、人間の精神現象のみならず、地球・天体の自然現象の、すべてに通じる物理である。

我々の生命活動は、何一つ行為するにも、何一つ思想するにも、生きるということは、サヌキとアワの互換重合ならざるはない。

実際にその場その場の、（右手・左手のフト、右足・左足のフト、そして呼吸のサヌキ・アワ等の、）それぞれの場のフトのチカラの波動（ヒビキ）が、何重にも重なり合い、統合された共振波動となって、新しいイノチのヘカ＞が発生され、そのおかげで、我々は、今、今、の生命を、生かされているのだ、ということの、実感としての、感受。（実）四首　イハトハニ）

則ち、我々の生命体のあらゆる細胞から発せられる、サヌキ・アワのチカラの対向発生（フト）によって、一刻一刻に、アマウツシ・カムウツシされて生きている、その生命賦与の真実の実感である。

生命の賦与ということが、このような潜象の微波動次元の、ものすごい数のフトによってなされている、ということがわかったとき、フツフツとわきおこるヨロコビ～感動。

アワのチカラを起励する

カタカムナのサトリが、今までの宗教哲学思想科学等の発想と根本的に異なるのは、今までの、サヌキのチカラしか知らないサヌキ的な一方的な真理では無く、アワのチカラを知った、フトのサトリであることである。

したがって、カタカムナの勉強は、アタマでわかり、観念的に納得する（しない）状態では、本当にわかったことにはならない。

又、＜ミ＞と＜イ＞の意味の違いがわからなければ、感受性を鍛えることはできない。

「ミを入れて」とか「思念を入れて」「心をこめて」「ヒラメキを入れて」等というのは、アワのチカラを起励して、ということである。

サヌキ（判断行為のチカラ）は、その、アワ量なりのレベルで出るものである。

アワ性は、潜在能力であるから、持っていても、鍛えなければ、発揮しない。
つねに鍛えていなければ退化する。

鍛えれば、誰でも、（子供も若者も、老人も病弱者も、頭の善し悪しにかかわらず、現代人も古代人も、誰であっても、マトモに鍛えれば、）正直に向上する。

感受性を鍛えるといっても、難行苦行ではない。
アワのチカラを忘れ、サヌキのチカラだけで、人のコトバや出来事を、受けて出すしかなかった今までの自分のクセを、そのままにさせず、パッとヒラメキを入れて、アワの心（チカラ）を起励してやるのである。

ヒラメキを入れる（思念を入れる）、というのは、アタマで考えるのではない。
日々刻々の、その時の自分の感受性（アワの心）を起励して（カムウツシをよんで）、マノスベに照らして、生きることである。

＜ヒ＞

要するに、＜ヒ＞とは、＜カ＞が＜タ＞した（カタ）最初の一個のカムツミであり、目にみえぬ潜象のチカラながら、左マワリ（ヒタリ）と右マワリ（ミキリ）の＜サカ＞の状態で存在する。

左（ヒタリ）とは、「ヒからタしてリすること」、右（ミキリ）とは「ヒのミからキしてリすること」という思念であるから、左マワリはアワマワリ
右マワリはサヌキマワリ　というわけである。

則ち、＜カム＞は、目にみえぬ（形の無い）潜象であるが、それは、チカラの状態であり、チカラは、一か所に停止することは無い。動けば、左へまわるか右へまわるかしか無い。

その左マワリ（アワ）と右マワリ（サヌキ）の極微のチカラが、無限的に存在している状態を、カタカムナ人は、＜カム＞とよんだ。

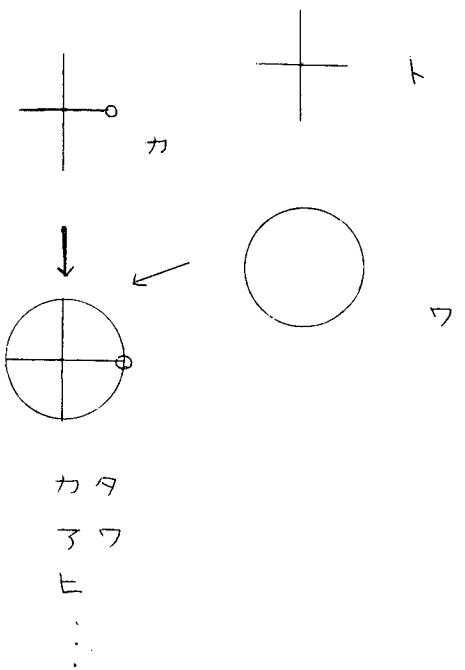
そしてその左マワリ右マワリの小さなチカラが出会い、巻きこまれて（重合して）、一個のマリ（フトタマ）（潜象粒子）となったものを、＜ヒ＞とよぶわけである。

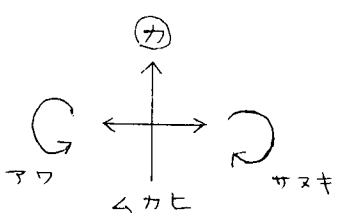
カタカムナノウタヒ（カタカムナ文献）を解読し、その感受の根拠～波動を現代にヨミガヘラセ、ヒトとしての存在様式を転換し得る根拠（物理・方法）を解明～提起しつづけている相似象学会の作業によれば、さらに、次のような直観物理が感受される。

あらゆる現象の発生機構を解明している潜象物理の言葉における、ヒフミヨイの＜ヒ＞について。

フトタマの＜フ＞、カムの微分の＜カ＞の正反（フ）とは、左旋（アワ）・右旋（サヌキ）の極微の渦状の、潜象のチカラの状態のモノである。
（そのスケールは、マイクロもナノもおよばぬアマハヤミ）

その＜フ＞が＜ト＞（重合・対向・結合）した＜タマ＞が＜ヒ＞であり、カムアマの＜始元量＞である。
我々の宇宙環境には、潜象の＜カ＞の＜フ＞（左旋・右旋の正反のチカラ）や、＜ヒ＞（始元量）の潜象の渦状のマリが、無限に（密充填的に）存在しているわけである。





正反対向発生

ラージヒ　スモールヒ

あらゆるものは、一個から発生することは無い。

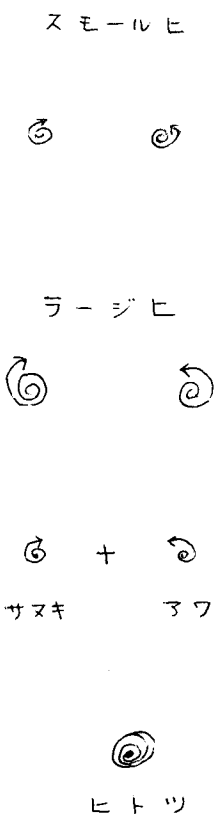
＜カム＞から＜アマ＞が生まれるといっても、＜カ＞一個から＜マ＞が生まれることは無い。

又それは、いかに極微の、又は巨大な潜象であっても、停止不動の状態である筈は無い。

＜カ＞そのものが、左マワリ、右マワリの状態で存在する。

しかしそれは＜カのツ＞には違いないが、まだ一個（ヒトツ）のマリになる前の潜象のチカラの状態であるから、＜カムツミ＞ともいえない。

それで、相似象学会では、それを＜ヒ＞になる過渡の＜スモール　ヒ＞といい、重合して＜ヒトツ＞になったものを＜ラージ　ヒ＞とも、いっている。



つまり、カムは、＜スモール　ヒ＞の状態で、無限に存在しているわけである。

言い換えれば、＜スモール　ヒ＞には、左マワリ・右マワリがあるから、それが出会えば、重合（ト）が起きて、＜ヒトツ＞になる。

則ち、左マワリと右マワリの潜象のチカラの渦（ウツ）は、正・反のマワリがマジリ合い（互換対向）、カタカムナのカカワリの場ができて（対向発生）、＜ヒ＞の重合（ト）が発生（ツ）するのである。

＜ヒトツ＞とは、一個（ヒトツ）の＜カムツミ＞（ヒ）が発生するにも、＜カ＞の重合がある、というサトリである。

その＜ヒトツ＞には、又、左マワリ（アワ）と右マワリ（サヌキ）がある。

なぜなら、左マワリと右マワリのスモール　ヒが重合するトキ、同じ強サということはあり得ないから、強い方のマワリが弱い方を巻き込むカタチになり、重合したラージ　ヒ（ヒトツ）は、表面は、強い方のマワリ（ヒタリ又はミギリ）を示しているが、内部には、弱い方のマワリが重合している。

（左・右のマワリのものを、ただ合わせても、＜ヒトツ＞にはならない。）

それを重合させているモノが、目にみえぬ潜象（カタ　カムナ）のカカワリであり、重合したマリ（ヒ）の中に入って、マリ（ヒ）の命を保つチカラとなるのである。

（↓対向発生・互換重合の潜象物理の基本パターン。）

「マワリテメクル　ムナヤコト　アウノスヘシレ」（第五首）

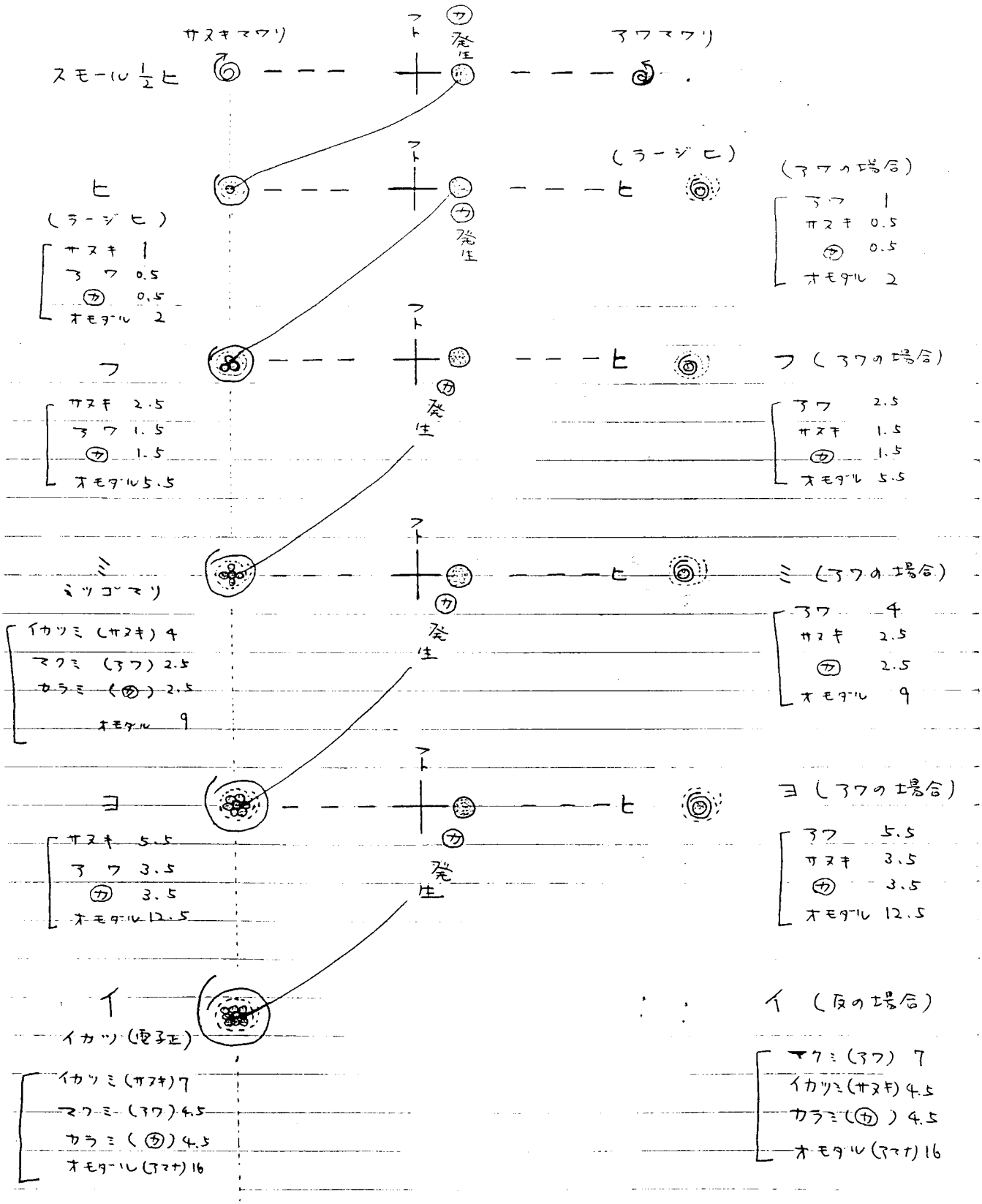
＜ヒトツ＞というコトバは、このような最初の一個の意味であるが、又、同じヒ（根源）から出たものを、すべて集めた統一の＜ヒトツ＞（全体）という意味もある。

カタカムナのコトバ（日本語）は、いずれも、おのずから、正・反の（サカの）意味をもつものである。

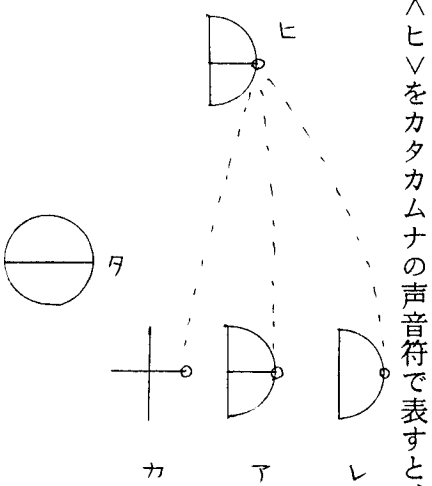
日本語の成り立ちが、自然現象そのままのもの（抽象）である故であろう。

＜ヒ＞という日本語の基底思念は、

《カム無限量から発した小さなウヅの左マワリ・右マワリの＜ヒ＞が＜ヒトツ＞になったモノ（フト）、それは、すべてのあらゆる万物万象の起源の始元量であり、根玄（オホモト）の＜ヒ＞である》という、カタカムナ人の潜象のサトリの根本をしめすものである。


サヌキマワリ
アワマワリ
スモール½ヒ
ヒ
(ラージヒ)
サヌキ 1
アワ 0.5
カ 0.5
オモダル 2
(アワの場合)
アワ 1
サヌキ 0.5
カ 0.5
オモダル 2
フ
サヌキ 2.5
アワ 1.5
カ 1.5
オモダル 5.5
フ (アワの場合)
アワ 2.5
サヌキ 1.5
カ 1.5
オモダル 5.5
ミ
ミツゴマリ
イカツミ (サヌキ) 4
マクミ (アワ) 2.5
カラミ (カ) 2.5
オモダル 9
ミ (アワの場合)
アワ 4
サヌキ 2.5
カ 2.5
オモダル 9
ヨ
サヌキ 5.5
アワ 3.5
カ 3.5
オモダル 12.5
ヨ (アワの場合)
アワ 5.5
サヌキ 3.5
カ 3.5
オモダル 12.5
イ
イカツ (電子正)
イカツミ (サヌキ) 7
マクミ (アワ) 4.5
カラミ (カ) 4.5
オモダル (アマナ) 16
イ (反の場合)
マクミ (アワ) 7
イカツミ (サヌキ) 4.5
カラミ (カ) 4.5
オモダル (アマナ) 16
ハコクニ
アマナクニ・アナマククニ (四号2・7頁)
カタチ (原子)
チカラ (核子・アマナ)

＜ヒ＞をカタカムナの声音符で表すと、



則ち、＜ヒ＞の声音符は、「タした潜態」（大円の潜象系）を意味する右半円（右半球）と、「カ」「ア」「レ」の声音符と同じ位置にある小円一個とでつくられている。

＜ヒ＞は、＜ヒトツ＞という数の最初の思念を示すと共に、

あらゆる現象の存在（ア）と、

その根源に潜在するチカラ（カ）

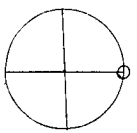
の思念をふまえてつくられた声音符であることがうかがわれる。

＜ヒ＞とは、あらゆる現象の根源（カ）であり、

あらゆる現象の始元（ア）である、

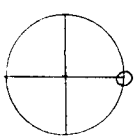
という思念が、こもっている。

＜ヒ＞を図象符にすると、

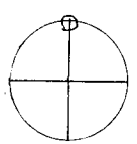


ヒ

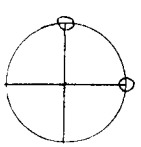
ヒサ
ヒト・ヒタリ
ヒトワ・ヒヒキ
ヒカリ
カタ・タカ・カ
カサ・サカ・サカキ
カヒ・カカ・カカワリ
ア・アワ・アワトサ
アカ・アカキ・アキカタ



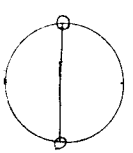
ヒタリ



ミキリ



カミ



アワリ

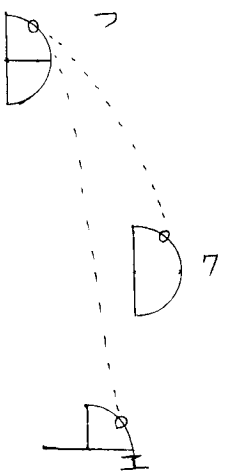
これらの思念が潜在していることがわかる。

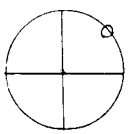
図象符にする、ということは、大円の中に入れてみることであり、＜ヒ＞を大円に入れてみるということは、＜ヒ＞が現象界に於いて、どういう状態になるか、ということが示されることになるので、それを感受してみるわけである。

ヒフミヨイの＜フ＞

＜フ＞をカタカムナの声音符では、「タした潜態」（大円（ワ）の潜象系）を意味する右半円と、「ク」「ヱ」の声音符と同じ位置に附された小円一個とであらわしている。

＜フ＞を図象符で示すと





フト・フタ

フキ・サク

クサ・タクリ

ワク・サトリ

カムのチカラの、左マワリ・右マワリの「ツ」（スモール　ヒ）が、重合して「ヒトツ」（ラージ　ヒ）になり、更に、その左マワリ・右マワリの「ヒトツ」が重合（アウ）して「フタツ」になる。

そのように、自由に（ク）、「カ」のカカワリの場に恵まれて（ヱ）、ヒトツからフタツにふえることが、＜フ＞の本来の思念であった。

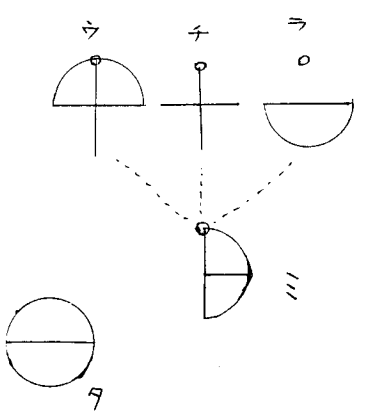
カタカムナウタヒ（カタカムナ文献）の中で、＜フ＞が用いられる時は、たんなる「二個」という数詞ではなく、「フタツ」の、（則ち、「左（アウ）マワリの渦」と「右（サヌキ）マワリの渦」の、）「カム」と「アマ」の＜フ＞をさしている。

フトタマの＜フ＞は、総称すれば、「アマとカムのチカラ」のことであるが、実際に我々に「カカハッテくるもの」は、微分系の＜アマナ＞と＜カムナ＞をさすことになるのである。

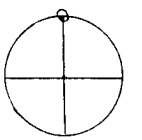
＜フ＞～＜ふ＞の思念がふくまれる様々な＜日本＞語の言葉を思い浮かべ、この＜フ＞の基底思念を感受してみよう。

ヒフミヨイの＜ミ＞

＜ミ＞を声音符で表すと、



＜ミ＞を図象符で示すと、



ミ

ミト・サチ・トサチ

ミチ・サキミチ

ミキリ・トチ・トウ

タチ・チサキ・

ウタ・ウキ

ウミ・ウチ（ウラ）

則ち、「タした潜態」（大円の潜象系）を意味する右半円と、「ウ」「チ」「ラ」の声音符と同じ位置におかれた小円一個でつくられている。

＜ミ＞とは、＜ヒ＞則ち、左マワリ、右マワリの潜態のチカラのマリ（スモールヒが、ラージヒになったもの）が、重合して＜フ＞となり、その左マワリ・右マワリの＜フ＞が＜ヒ＞と重合して、＜ミ＞となったマリである。

＜ミ＞は、カムアマ始元量（ヒ）の変遷物であるから、マリ（マからリした球状のモノ）であるが、潜象のチカラの状態である。

則ち、左マワリ・右マワリのマリが、（メビウスの輪のように、）三回、重合（ト）されて、「ミツゴ」となり、「モコロ」を形成する。

「ミツゴ」は、電子・原子をはじめとする、あらゆる現象物の実質であり、その内容は、イカツミ（電気素量）、マクミ（磁気素量）、カラミ（力素量）の三素量である。

「ミツゴ」は、潜象のチカラが形態をもった最初のものである。

＜ミ＞の実質とは、ミツゴマリ、則ち、カからタしたカムツミの重合体である。

則ち、スモールヒの左・右マワリのチカラが重合（ト）して＜ヒトツ＞のマリとなり、その＜ヒトツ＞の左（アウ）・右（サスキ）マワリのマリが重合（ト）して＜フ＞のマリとなり、＜フ＞の左（アウ）・右（サスキ）のマワリのマリが、＜ヒ＞の左（アウ）・右（サスキ）のマワリのマリと重合（ト）して＜ミ＞となったマリであり、潜象のチカラは形態が構成されると、それなりの機能を発生する。

それ故、ミツゴは、左マワリのアワの磁気素量（マクミ）と、右マワリのサヌキの電気素量（イカツミ）と、そしてそのミの中に、サヌキ・アワの重合によって発生した「ヤタノカ」の「カ」の凝集した「カラミ」（力素量）とがあるわけである。

我々の環境、則ち宇宙空間には、このようなカからタした「カムツミ」（アマ始元量）の、様々な状態の潜象（スモールヒの左マワリ・右マワリの状態の潜象のマリと、＜ヒ＞＜フ＞＜ミ＞の状態の潜象のマリ）が、満ち満ちている。

というより、様々な潜態のアマ始元量の密充填状態（ミクマリ）を、「マ」「アマ」「タマ」（宇宙球）とよんだのである。

（それ故、アマとカムは、潜象であるが、所謂、異次元世界の思想では無い。我々の現象界とは別に潜象界が存在するわけでは無い。）

アマ宇宙の中には「カムツミ」の様々な状態の潜象が存在し、その中で、＜ミ＞のミツゴマリは、最小単位のマトマリとして存在している。

アマ宇宙には、それらの潜象と、潜象過渡のモノが、遍在している。（その状態を「ミクマリ」という。）

その中で「ミツゴ」は「モコロ」を形成し、＜ヨ＞＜イ＞の「トキ」「トコロ」のマリと重合して、「イカツ」（電気粒子の正（サヌキ）・反（アワ））となり、「アマナ量」なりに、水素以下のあらゆる原子を構成し、分子・細胞を造り、万物万象の形態を構造する。

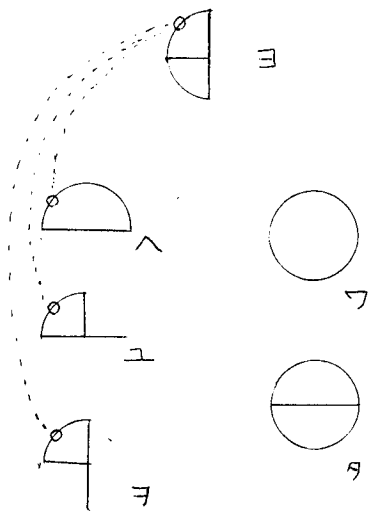
宇宙のあらゆる物質の実質は、この＜ミ＞の「ミツゴマリ」をさすわけである。

「ミツゴ」（カムアマ始元量の変遷物）が、「場」に応じて（それなりの「トキ・トコロ」のマリの重合によって）、則ち、カタカムナの対向発生（アウノスベ）によって、あらゆる万物万象を発生するのである。

それ故、カタカムナのサトリによれば、あらゆるモノが、（鉱物・石・金属、無生物といわれるものも、）すべてイキモノであり、あらゆるモノは、（天体も、動物も、人間も、人間の精神も、）すべてカム―アマの変遷物であり、カム―アマの「相似象」である、という所以である。

ヒフミヨイの＜ヨ＞

＜ヨ＞という声音符は、「タしたマ」のワ（大円）の現象系を意味する左半円と、「へ」「ユ」「ヲ」の声音符と同じ位置にある小円一個とでつくられている。

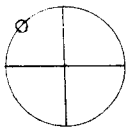


＜ヨ＞という声音は、「四」という数の意味でもあるが、単なる数詞ではなく、「へ」（方向性）「ユ」（湧き出る、トキする）「ヲ」（四相性をもって出現する）という思念がこめられている。

＜ヨ＞とは、ヒがフになりミとなったミツゴマリが方向性をもち、四相性をもって湧き出す（トキする）という思念である。

＜ヨ＞はトキのマリである。（トキ・トコロの本義）（序＝断片的ヴィジョン(13)＜トキ＞＜トコロ＞＜マ＞参照）

＜ヨ＞を図象符で示すと、



ヨ

トヨ　ヨワ

ヨリ　サヨリ

サキヨリ

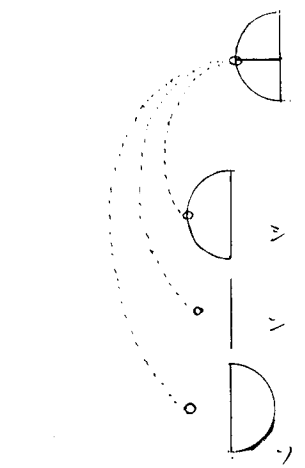
へ　サ

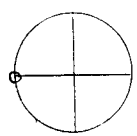
ヲ

ヒフミヨイの＜イ＞

＜イ＞という声音符は、「タしたマ」のワ（大円）の現象系を意味する左半円と、「シ」「ン」「ソ」の声音符と同じ位置にある小円一個とでつくられている。

＜イ＞を図象符で示すと





イ
イワ・イワト
イサ・イサキ
イキ・イキトキ
イシ・サトシ
ソト
ソキ

＜イ＞は、「五」という数の意味でもあるが、そもそもは、モノの発生の順序を順々に示す意味である。

則ち、ヒがフになり、ミになり、ミツゴになったマリが、「ソ」して「ン」して示され、トキ（ヨ）してトコロ（イ）を得て、現象の最小粒子（イカツ）となる。その順序を示す意味である。

ヒフミヨイは、ヒがフになり、ミになり、ヨしてイになったマリであるから、＜ヒ＞も＜フ＞も＜ミ＞も＜ヨ＞も＜イ＞も、皆、カムアマ始元量の変遷したマリ（潜象過渡粒子）である。

フトによってミとしてミコトされる、則ち、生命の実質を得て、マに定着しうるレベルに達し、更に、定着が確かなものになって現象物として発生する。その最初の最小の、ハジマリのものを、＜イ＞と名づけたのである。

＜イ＞のイカツは、現象に発生した最小の粒子であり、あらゆるイキモノの生命体を構成する最小単位の極微粒子である。

＜ヒ＞＜フ＞＜ミ＞はミツゴマリ、＜ヨ＞＜イ＞はトキ・トコロのマリとよぶが、実質は、すべて、カムアマ始元量の変遷したマリであり、結合の仕方によって、様々なトキトコロ則ち万物万象の形態が構造される。

＜イ＞が＜マ＞（現象界）に発生した最初の状態が「イマ」であり、＜イマ＞は最小の時間である。（＜イ＞の存在する、最小の時間が「イマ」（今）である。）
そしてこの＜イ＞の状態が持続的に存在していることを「イチ」（位置）といい、科学で「位置エネルギー」という時の実質は、この＜イ＞の＜チ＞なのである。
それ故、＜イ＞は、最小の位置、則ち「トコロ」であり、同時に、最小の「トキ」である。
科学でいう「時間・空間」「場・位置エネルギー」の本質は、「トキ・トコロ」であり、「時空の元」の原点は＜イ＞である。（第八・第九首）

＜イ＞は現象物の最小単位の粒子で、イカツ（電気粒子）にあたり、右旋・左旋（サヌキ・アワ）の正反があるからイハである。

現象物の発生の物理（順序）を示す＜ヒフミヨイ＞の＜イ＞は、おのずから五（イツツ）という、数を示すことにもなる。その五（イツツ）とは、＜ヒ＞から＜フ＞となり＜ミ＞となったミツゴマリ（イカツミ・マクミ・カラミの三素量）と、＜ヨ＞＜イ＞則ちトキ・トコロの五（イ）である。（生命体構成の最小単位）
＜イ＞はこの五（イツツ）の素量が重合したもの。

その＜イ＞が、おびただしい数の発生（ムナヤコト）を繰り返して、原子・分子・細胞となり、生命体を構成し、様々に変遷してゆくことを＜イ＞の＜ノ＞の＜チ＞則ち「イノチ」（命）という。それは、「フトマニ」としてニされたものである。

それ故、「イノチ」は、おびただしい数の、「イマ」「イマ」に発生する「イマタチ」のものであり、その発生の持続（チ）されることが、「イノチ」なのである。

カタカムナの表現では、
時間の本質は「トのキ」であり、時間とは「トキのマ」であり、
空間は「トキしたトコロ」であって、「トキ　トコロ　トコタチ（互換重合）」といっている。

カタカムナ人が、ヒフミヨイの　ヨ　イ　を、トキ　トコロのマリとした意味を感受して、日々、良いトキ　トコロを発生持続して生きることができるよう、感受性の鍛練に努める。

＜ヒ＞をわかるにも、カタカムナの四十八の声音思念すべてを感受しわかる（ヒビキ）必要があるが、今後、さらに感受を深めつつ実習～作業していく。

カタカムナ人は、直観によって、分子・原子・電子以下の極微（潜象と潜象過渡）の物理を解明していた。その潜象物理は、現象の物理に一貫してつうじるものである。（相似象）

ヒフミヨイ発生

ヒフミヨイ　マワリテメグル　ムナヤコト・・・・・・（カタカムナ文献第五首より）

とは、無限量カムから、どうして現象物質～万物万象の生命体、あるいは、精神現象、が発生するのか？

について、カタカムナ人の感受し、開発した潜象物理を示したコトバであった。

＜ヒ＞とは、カム無限量から発生したアマ始元量の、最小の単位（マリ）である。

＜ヒ＞のマリとは、科学が最小としている電子・原子・素粒子・・・よりもはるかに小さい、科学がまだ発見していない極微の潜象のモノである。

「カタカムナ」の＜カ＞とは、人間の能力では、「カム」（無限量）というしか無いが、確かに存在し、潜象のチカラの状態で、左マワリ・右マワリの極微のウヅをまいて、宇宙環境に遍満しているものである。（カタカムナの四十八の声音思念の中で、最も大事な＜カ＞について、次号以降さらに記す。）

カムは潜象のチカラの状態で左マワリ・右マワリの極微のウヅをまいて遍満している、といっても、それだけでは、何ごとも始まらない。

実際は、極微のウヅであっても、そのチカラには、大・小さまざまの差がある。

それ故、その左マワリ・右マワリのチカラが出会えば、チカラの強い方のマワリに巻き込まれ、表面は、左（又は右）のマワリを示し、内部に、反対の右（又は左）のマワリを重合したマリになる。（カタチサキ）

この、最初に出たマリを、カタカムナ人は、＜ヒ＞とよんでいる。

＜ヒ＞とは、最初の「アウノスベ」（正反対向・互換重合）の示しであり、最初の「フトマニ」である、ということができる。

則ち、正・反（サヌキ・アワ）のものが相対して向かい合う場（トコロ）ができると、カタカムナの重合（カムウツシ）が発生（トキ）する、という、生命発生のサトリである。

それは、原初の宇宙の、最初の生命の発生、というだけの意味では無く、およそあらゆる天然・自然・人間の現象（雨や雲の自然現象から、自然の生物・人間の身体と精神の生命現象）、最初の宇宙から今日まで続いている、あらゆる現象の発生の物理である。

「フトマニ」とは、サヌキ・アワが相対して、カムと対向することによって、発生の場ができる、則ち重合（カムウツシ）がオキて、マに、発生する、というサトリである。（第三首）

具体的には、宇宙環境には、無限量カムの潜象のチカラが、左マワリ・右マワリのウヅの状態で存在する。その正反のマワリのウヅが出会うと、弱い方を巻き込んで、＜ヒ＞のマリになる。

＜ヒ＞は、カムの潜象粒子であるから、「カムツミ」ともいう。（カムツミ・スモールヒ・ラージヒ　前掲参照）

＜ヒ＞のマリは、表面は左（又は右）のマワリを示しているが、内部には反対のマワリのチカラを重合している。重合して＜ヒ＞のマリとして存在していられるのは、「アウノスベ」（対向発生）で、＜カ＞（イノチ）が発生（カムウツシ）されているからである。（「ヤタノカカミ　カタカムナ　カミ」の本来性の故。）

「ヒフミヨイ」というのは、このようにして、カム無限量から分離したカムツミ（ヤタノカ）が、「ヒトツ」の右マワリ又は左マワリのマリとなり、中に＜カ＞が発生して生命をたもっている。

その正反のマワリの＜ヒ＞のマリが出会えば（アウノスベ）、「フタツメ」の正反（右マワリ・左マワリ）の＜フ＞のマリとなり、内部に反対のマワリを重合し、中に「ヤタノカ」が発生し＜フ＞のマリの命を保っている。

その＜フ＞に又＜ヒ＞が出会えば（アウノスベ）、同様にして「ミツゴ」のマリとなる。

「ミツゴ」とは、右（サヌキ）マワリのチカラの「イカツミ」と、左（アワ）マワリのチカラの「マクミ」と、フタツの重合で発生した＜カ＞の「カラミ」との三素量である。（オキミツゴ　第二十二首）

「ミツゴ」マリは、あらゆる生命の実質であり、その上に、＜ヨ・イ＞（トキ・トコロ）のマリの重合があって（アウノスベ）、「イカツ」が発生する、ということである。

「イカツ」は、科学で電気粒子といっているモノにあたる。

「イカツ」という場を構成するマリだから、＜ヨ・イ＞のマリを、トキ・トコロのマリというわけである。（カミの仕事場）

カムから分かれて出た（タした）「マリ」は、ヒタリ・ミキリに旋転しながら、「ヒフミヨイ」と、重合変遷を繰り返し、「ムナヤコト」と、六方環境から、おびただしい数の重合発生を繰り返して、ヤ（飽和安定・極限崩壊）に至るまで、重合の対向発生が繰り返される。

アワのヒラメキ（の入れ方）

カタカムナ文献を解読した楢崎皐月は、このような、感受に基づく判断――人間の大脳次元の観念の判断では無く、感受（対向発生―カムウツシ）によって発生する判断認識――を、「直観物理」といった。

脳（サヌキ・判断）の力ばかり発達させ、感受性（アワ）を忘れ～劣化させたことが、現人類の悲劇の因（ツミ）であることに気づくなら、我々は、何としても、これまでのような脳の能力（サヌキ）ばかり鍛える人間の生き方を自ら変えて、感受性（アワ）を鍛え直す生き方を実行する以外に救いは無い。

感受性を鍛え直すといっても、今までのサヌキ的な修業や勉強のような努力では無い。

＜カ＞と＜マ＞のチカラ、則ち自分の生命力のアワとサヌキのフトマニの物理を知って、何をするにも、サヌキに前駆するアワを起励し、脳の感受性に正しく感受させ、マノスベの判断行為をだすようにさせる、ということである。

具体的には、何をするにも、ヒトツ　ヒトツの考え・しぐさ・振る舞いのマに、マエに、オクに、パッと＜ヒ＞の感受を入れ、自分のアワの感受性を刺激する（起励させる――カムウツシをよぶ）というだけのことである。

刻々に（脳も身体も）ヒライテ、ユルメテ、そのマにスキに、＜ヒ＞の＜ヒラメキ＞を入れて、アワのカムウツシ～対向発生をよぶのである。

めんどうなことでも時間がかかることでもない。＜ヒラメキ＞は＜アマハヤミ＞（超光速）であり、刻々に、フッ、フット、ミ（身）に、自ずと、このチェックがはいればよいのである。

無駄なサヌキが出てしまってから気づく、という、自己史～人類史のくりかえしを越えて行くためには、何をするにも、つねに、自分の感受性（アワ）を起励して、ヒラメキを入れる、という生き方をしないと、我々は脳の感受性はウワのソラの状態で、（大脳が進化した為に、）いつも、サヌキのアタマががんばっている。（頭のよい人々ほど、いっそう、そうである。）

それ故、何をするにもねその場でスナホに働くべき脳の感受性（アワの心）はお留守で、サヌキのアタマが、いつもでしゃばるために、感受に基づいてマトモな判断行為を出すという、正常な生命活動ができないのである。

それでも、つねに、呼吸のように（呼吸自体、サヌキとアワの重合・ヒビキアヒ）、感受性鍛練の気持ちを心掛けていると、ヒラメキをいれよう、と思う前に、ヒトリでに、（自然の動物のように）無意識にアワが入って、脳の感受性が正しく働き、よいサヌキを出していた、ということになってくる。

今までは、我々は、生命とか、生命活動、といっても、「サヌキ」のことしか考えなかったが、我々の生命活動（サヌキ）には、「アワ」のチカラが、必ず、前駆（カカウリ）して（同時的に共役して）、基本的に存在していたことを、カタカムナによって、はじめて物理として知らされた。

立つにも歩くにも、何一つ行動するにも、話すにも、考えるにも、つねに、アワのチカラを鍛え高めていなければ、よいイノチ（マノスベ）にはならない。

自然の動物は、皆、ひたすら、自分のアワ（感受性）を鍛えて一生懸命に（マノスベに）いきている。

人間だけが、アタマ（サヌキ）ばかり鍛えてアワを忘れ、その為に病気になったり、怪我をしたり、争いや悩み苦しみから抜けられなくなっている。

「アワ」のチカラの本質は、カムのチカラであり、

「アワ」とは、カムを感じ、カムウツシを感受する、生命の感受性のチカラであるから、アワを鍛えるとは、感受性を鍛えることに他ならない。

我々の生命力とは、感受性（アワ）と判断力（サヌキ）であること、アワはカムのチカラであり、サヌキはアワから出ることを忘れてはならない。

「サヌキはアワから出て、アワの量（ナカウ）だけのサヌキを出す」のである。

生物として、本来だれ一人として持たないものは無いアワの感受性も、たえず鍛え高めることなしには、無きに等しいものとなってしまう。

しかし、アワを鍛える生き方の実習は、サヌキの鍛練では無いから、難行苦行になることは無い。

我々は、どうしても、「サヌキ」のチカラでコトバヤや判断行為を出してしまう習性(セ)がついているから、まず、その自分の脳を逆序（オシヘ）して（といっても、アタマで強制するのではなく、）自分の脳がサヌキを出す前に、（パッとヒラメキを入れて）その場のアワを、起励してやるのである。

このことは、気をつけるとか一生懸命注意するというような、脳からの指令を出すことではない。ヒラメキを入れるのは、思念で入れるのである。

イノチのモトへ、オクへと、微波動的に感受をむけるのである。
実にカスカナ、カロヤカナ、ミのココロ、アワのヤシナヒの持続である。

孔子やキリストや釈迦のような天才は、自らは大きなアワ量があるために、仁や愛や正覚のサトリを得たのであるが、アワのこと・アワを鍛え持つということ（カタカムナのイノチの物理）を知らなかったため、自分はわかることのできた仁や愛や慈悲の心を、本当には、人に伝えわからせることができなかった。
一人の後継者も真に養い鍛えることができず、観念レベルの宗教化がなされていくのをあらかじめ、ふせぐことはできなかった。
又、あらゆる革命思想がたどる道についても、同様の問題が存在する。

これらのことへの痛切な自覚のうえに、カタカムナの鍛練実習は、在る。

あらゆる現象は、カムからの変遷物であるから、あらゆる現象のオクに潜象（カム）がある。
潜象(カム)界と現象(アマ)界とは、別の元の（異次元世界とか反物質などという）ものではなく、潜象(カ)の中に現象(マ)があり（マ・カ・タ・マ）、現象(タカミ)の中に潜象(カムミ)があり（フ・ト・マ・ニ）、潜象(カ)は現象(マ)の環境にある（オ・カ・シ）。

カカタカムナの言葉の特徴

カタカムナの言葉の特徴は、観念的陶酔や宗教的帰依〜とびこえではなく、コトバの一音一音が、脳の振動波の高調を発生(キ)させ、脳のアマナとの対向発生・カムウツシにより、微波動的なあらゆる振動波を発生させ、オクへ、オクへと、脳のアワのミの感受性〜潜象感覚(カン)を深め得る物理、〜ハタラキ、根拠と方法をもっていることである。

実習〜鍛練としての表現過程。したがって、表現内容とともに、発生している振動(ヒ)波の高調(ヒ)〜転換(キ)こそが問題なのだ。

文体の同一性や原文そのものの登場という場合も、どのような根拠と方向軸でそれをなしているかによって、まるで意味がちがってくる。

序＝断片的ヴィジョン　は、潜在アワ量の開発〜波動量鍛練の過程そのものを、実習として、表現として、示すもの。

＜場＞のつくり方。

このような圧縮した作業をへてはじめて、その振動量〜波動量として、一音一音のヒビキを感受し得る＜場＞が発生しはじめうる。
知識〜アタマの理解にとどまっては決してわかることのない音のヒビキを、真にミの波動として共振〜感受しうるための、発生場としての作業。

ここでは＜ヒ＞音〜の声音思念を感受する潜象作業をおこなっているのである。

カタカムナを学ぶことは、自分がもっている思想の根拠や脳の働かせ方が、（人類史的に）どのレベルのものであるか、どの程度の波動量のものであるか、を判断しうるだけの波動量をミにつけ得る、ということである。

体験や情況に促されて人間は様々の思想、考え、を抱くが、自分の脳が働いた結果の思想を意識にだして、自分の脳にふりまわされているだけで、その当の自分自身の脳の感受性が退化していることに気づかず、脳の本質本性を知らずに、人間の脳の落とし穴に陥って、脳のクセに振り回されている。

このレベルで、今、自分のもっている考え・思想が真理であると一方的に思い込んでいる、その思想がどのレベルのものであるか、そのアワの感受性からのチェック（をなし得る根拠と物理、波動量、又、それを他者に伝え得る言葉の根拠をもつ）なしに、なされる様々の現実対応は、いかに切迫しているように見えても、観念の陶酔次元の満足と異常バランス、凶ならざるはなし、の、じたばた運動におわる。

そうであっても、動かざるを得ない、という瞬間に人はみまわれることがあるとして、すること、しないこと、を対等の根拠・アワの正・反から包括。

どのような行為も、それが無意識にもっている根拠や方向軸の深さをすくいとることなしには、その現実的レベルを評価～批評することはできない。

＜ミ＞は、無意識領域における超高速の潜象のチカラ。

渦状～螺旋状にくりかえしヒトツの声音について、記しているが、同じレベルでくりかえしているのではなく、くりかえしつつふかめられていく、その振動波～共振波動の発生を、微波動的に感受していただければ、さいわいである。

このような作業を通じて、定着～発生を期している。

本質のみを、一気に述べる方法だけによっては、＜ヒ＞の本質は提出されきらない。
感受しうる根拠～方法と条件＝場をつくる～ととのえることなしには、カタカムナの声音思念を本当には受け取ったり伝えたりすることはできない。

これらの作業がおのずと、＜日本＞語の一音一音の声音思念の根拠を抽出する、辞書としての構成にもなっていくこと。
このような作業をめいめいが行うことによって、はじめて、共通の言葉～テーマを、真に見いだし得る。

カ・・・甲山事件　　ハ・・・反日　　オ・・・オウム

カルマ落とし。人間の業は、ハルマゲドンによって、人類何十億といえども、滅すことによってしかその業を落とし、次の高レベルの存在様式に至れない、その世界最終戦争を自らが開始～吸収～終結する、と確信～予感する者。そのためには、現代科学世界が持っているレベルとそれ以上のレベルの兵器を自ら入手～開発～製造～保持～使用するという発想。
単に日本国家への戦争ではない、ゆらぎ拡（核）散する権力国家像。

限界ということをもたない、無限に越えつづける心をもった一人の男＝科学者、それ故に又、自らの科学的観念性のレベルをチェックすることが困難なその人と、自らの宗教的観念性のレベルをチェックすることが困難な教祖が合体した時、発揮されるもの。
幹部ほど自らを追いつめ、逃れようのないところで、指令→実行へと進行しえたとして。

死の観念的把握はあっても、正・反の振幅をもったマノスベのイノチの物理・潜象カン・逆序のサトリは欠落している。

悪人往生の根拠の一つは、
正・反の反の要素　すなわち還元作用をはやめるという役割を果たしているという意味。他者への働き方も、それによってになう他者からの働かれ方も、より還元作用に近い、位置のとり方。又、正・反の振幅を大きく存在的揺れとして持つ～実現～踏み込む故に、ある場合には、この世界の順序（正・反の振幅で成り立つ）～成り立たしめているモノの根拠　により近しい～相似しうる位置をもち得る、ということ。

一度は滅した世界、滅した自己
として出発する時、刻々の対象化深度＝震度は、すべての人に問われている。

では　どうすればよいか。

アワのチカラをもって、生き直す他ない。
潜象教育の実践。サヌキ・アワのサトリに基づくカタカムナのアワの継承者鍛練。
正・反の振幅・四相を重合包括する、潜在アワ量の開発～アワの波動量鍛練。

（1995年8月）

ある朝

実習～鍛練としての表現過程。
潜在アワ量の開発～波動量鍛練の過程そのものを、実習として、表現として、示すもの。

四月のある朝、
うぐいすの鳴き声
一声が　おいしい
新鮮な、野や畑でとりたての野草や野菜を食したときのような、
おいしい！と　心から感じる時のあの、ふくらみのある、ほとばしるような、感覚で、聞こえて来た。
アマウツシ量の多さ～豊かさは、味覚にも聴覚にも～にも、同じ振動配列として感受されるらしい。

仮装畑でムシのわきかた～発生のしかたを観察していると・・・。
この宇宙にいっぱいつまっている、潜象過渡の生命原基。（密充塡）
それが、生物～生命界や物質界全体の関係の動き～変動の中で（発生条件＝場のつくられ方）、
フ、ト　ワク～発生。
これは、微生物から虫から人間に至るまで、一切・・・の、発生システム。

建築物も都市も、物質的形態をとっている構築物すべては、人間の思想レベルの表現。言葉と同じく、その波動レベルをあらわしている。

アワ性を育てる根拠と方法をもたなければ、根本的に人を、そして自らを育てることはできない。

（１９９４年４月）

どのように個別的、個々的事件～事態にみえようとも、そこには、全宇宙～全人類～全情況からの、普遍的情況的なもの（トヒ）としても訪れているという視点が不可欠である。――――
マノスベの照らしにより、人間的偏差をはかりつつ。
そうでなければ、本当には、どの事件～事態にも正しく対処できない。
逆序のサトリ・波動量鍛練・潜在アワ量開発も、このダイナミズムにおいて、とりくまれるべきものである。

仮装畑

それが亡びの道であっても、「場つくり」がなされていれば、人類は、その方向へ進行し続けるしかない。

人類がどのように自らを滅ぶべきと思おうと思うまいと、種々の〜を巻き込んで、天然の淘汰は容赦なく進行している。
問題は、このまま、極限に至って滅ぶに任せるか、それとも正・反の方向の根拠を物理としてわきまえた上で、アラタナヨミカエリ〜マノスベの方向軸をみいだすか？である。

願望や欲望ではない根源的リズム。

仮装畑
　様々な音を奏で
　　言葉を発している
　　その中へ、分け入ってみよう。

ヒロガル・ヒロメル・ヒロビロ・ヒロガリ・ヒロサ・ヒロバ・ヒタムキ・ヒロベ・ヒラミド・ヒラトウシ・

幼児（オサナゴ）は、モチヒカタがわからないアワのチカラにマカレテ心を痛める〜行き場のないアワの心が、身をサヒナム。

クヒ・クヒアラタメ・クヒノサトリ・ヒノサカエ・・・ケハヒ・ムカヒビキ・

ヒのアワのカタカムナ。
サカヒのサトリ。

ひらく・ひたすら・ひたむき・ひとひと・ひたぶるに・ひたり・よろこび・あじさひ・

動く右手より、ささえている左手に痛み〜負荷がかかる。
くび・てくび・あしくび・くびれ・

ヒザ・ヒジ・ヒダ・ヒデオ・ヒーロー・フルマヒ・クルヒ・ミナラヒ・テナラヒ・ヒナラヒ・

ウツス――賦与・映す・投影・照射・発生・移す・表現・写す・渦す・現し世・・・カム―
アマの変遷波動にのる・カムウツシ・アマウツシ・

＜ヒ＞の思念が（正反・四相の振幅をもって）生き、ふくまれる＜日本＞語。

ヒ（一・ヒトツ・日・火・灯・陽・氷・干・・非・否・樋・緋・杼・緋・・・微・美・・・）
ヒトツ・ヒトコト・ヒトリ・ヒトモト・ヒフ・ヒノキ・ヒナビル・ヒノモト・ヒトシズク・ヒ
トタマリモナク・ヒマワリ・ヒデリ・ヒメクリ・ヒナゲシ・ヒトリデニ・ヒトイキ・ヒマシユ・
ヒトデ・ヒトデナシ・ヒトトナリ・ヒトアメ・ヒトアセ・ヒトアワ・ヒトシホ・ヒトゴト・
ヒト・ヒフミヨイ・ヒエ・ヒガ・ヒガン・ヒオウ・ヒサメ・ヒョウ・ヒガミ・ヒカリ・ヒカル・
ヒビ・ヒトヒラ・ヒグチ・ヒマ・ヒタ・ヒバ・ヒズミ・非存在・
ヒル・ヒロ・ヒロイ・ヒロガル・ヒロメル・ヒロガリ・ヒロビロ・ヒロサ・ヒロバ・ヒロベ・
ヒサシヒ・ヒサエ・ヒエル・ヒアガル・ヒイデル・ヒカエル・ヒガゴト・
ヒカシ・ヒムカシ・ヒアイ・ヒイラギ・ヒク・ヒビク・ヒキワケル・ヒキシボル・ヒルガエス・
ヒク（抽・描・弾・引・挽・轢・曳・牽・惹・・・）
ヒコ・ヒメ・ヒミコ・ヒサシ・ヒザ・ヒジ・ヒシ・ヒシノミ・ヒス・ヒスイ・ヒソヒソ・
ヒソヤカ・ヒシヒシ・ヒジリ・ヒビコクコク・ヒタヒタ・ヒダ・ヒダカ・
ヒタムキ・ヒタスラ・ヒナ・ヒネ・ヒモ・ヒクミ・ヒサゴ・ヒゲ・ヒゴ・ヒコク・
ヒラク・ヒタイ・ヒダリ・ヒタヒタ・ヒタブルニ・ヒソカ・ヒッソリ・ヒドイ・ヒヤヒヤ・
ヒッシ・ヒサビサ・ヒケメ・ヒシグ・ヒシト・ヒサイ・ヒヤス・ヒトシイ・
ヒタイ・ヒツジ・ヒノヒカリ・ヒバリ・ヒネモス・ヒサシクモ・ヒトツブ・ヒタル・ヒツギ・
ヒルサガリ・テノヒラ・ヒトスジ・ヒカゲ・ヒタス・ヒサグ・ヒソミ・ヒケヲトル・ヒナタ・
ヒトマワリ・ヒグラシ・ヒカラビル・ヒトトキ・・ヒダマリ・・ヒゾク・ヒラヤ・ヒヨドリ・
ヒトトキ・ヒラメ・ヒジキ・ビロオド・ビイドロ・ヒトカブ・ヒナタ・ヒトミ・ヒトツトコロ・
ヒツウ・ヒアイ・ヒソウ・キョウビ・ヒサカタ・ヒン・ヒンヤリ・ヒララ・
ヒナ・ヒナマツリ・ヒシモチ・ヒマゴヒイジジ・ヒイババ・ヒヨメキ・ヒヒ・ヒワ・ヒワダ・
ヒユ・ヒヨコ・ヒラメク・ヒラメキ・ヒレフシ・イヤマヒ・ヒビキ・ヒラカナ・
ヒラ・ヒラク・ヒラキ・ヒラトウジ・ヒラタイ・ヒレ・ヒロウ・ヒワヒ・
ヒキイル・ヒキオコス・ヒキシメル・ヒイキ・ヒカエル・ヒネル・ヒモジイ・ヒルム・
ヒキコム・ヒキイレル・ヒキダス・ヒキサク・ヒキチギル・ヒキツグ・ヒキトル・ヒキヌク・
ヒキハナス・ヒキモドス・ヒキヤブル・ヒキオトス・ヒイテハ・ヒレフス・ヒキウケル・
ヒタス・ヒタル・ヒメル・ヒメゴト・ヒジキ・ヒジリ・ヒエビエ・ヒキダシ・ヒキタツ・
ヒンパン・ヒンシュク・ヒョウシ・
マヒ・クヒ・アサヒ・クサビ・アワヒ・サカヒ・ムカヒ・ムスヒ・ハヒ・ウヒ・ウタヒ・
カスカヒ・フトヒ・タマシヒ・マツカヒ・キヤマヒ・ヤマヒ・キヒ・アトヒ・ナラヒ・ネガヒ・
ニホヒ・ヨリソヒ・キビシヒ・タスケアヒ・カルヒ・ヨヒ・ハカラヒ・アリカタヒ・フルマヒ・
ワツラヒ・オモヒ・フルヒ・コヒ・スクヒ・アヒ・シバヒ・カヒ・シヒ・トヒ・アガナヒ・
ムクヒ・
マチガヒ・キチガヒ・イキホヒ・クルシヒ・ヨロコビ・ネラヒ・
アヒダ・アヒサ・アソヒ（ビ）・アタヒ・アキナヒ・カタカムナウタヒ・

クビ・テクビ・アシクビ・クビレ・ユビ・ノビ・アクビ・マノビ・セノビ・シビレ・オビレ・
セビレ・アビル・オビル・イビル・オビエル・カビル・シビレル・セビル・チビル・ニヒル・
ノビル・マビク・ソビエル・ハビコル・ワビル・サビシヒ・ワビシヒ・ミチビク・オビエ・
ヒのマ・アビル・カビ・エビ・イビ・イビキ・オビ・キビ・コビ・サビ・ワビ・シビ・タビ・
ニビ・チビ・トビ・クチビル・
ヘビ・マビキ・ミヤビ・ヒナビ・ヨビ・ヒビ・メビウス・トモシビ・モラヒビ・
アセビ・ワサビ・ナスビ・タビタビ・キビキビ・チビチビ・トビトビ・ノビノビ・
ツヒ・ハスカヒ・カスカヒ・ケハヒ・マヨヒ・マクハヒ・ツヒニ・
ヒラタイ・テノヒラ・ヒサシ・ヒサシヒ・ヒサシブリ・ヒヅメ・ヒンマガル・
ヒタヒタ・ヒシヒシ・ヒラヒラ・ヒクヒク・ヒンヒン・ヒマヒマ（ニ）・ヒリヒリ・ヒヤヒヤ・
ヒイヒイ・ヒーフーミー・ヒューヒュー・ヒウヒウ・ヒエビエ・ヒソヒソ・ヒニヒニ・
ヒュンヒュン・ヒョイヒョイ・ヒヤヒヤ・ヒクヒク・
ヒヤク・ヒノクニ・ヒイヅルクニ・ヒボッスルトコロノクニ・ツカヒカタ・ヒッサゲル・
ヒッカク・ヒックリカエル・ヒッツカム・ヒットラエル・ヒッカケル・ヒッカブル・ヒッコム・
ヒックルメル・・・ヒット・ヒッタイト・ヒマラヤ・
ピカリ・ピシャリ・ピタリ・ピヨピヨ・ピョンピョン・ピッタリ・ピュンピュン・ピシャピシャ
・ピチピチ・ピタピタ・ピトピト・ピイピイ・ピウピウ・ピカピカ・ピキピキ・ピクピク・ピ
クンピクン・ピコピコ・ピシピシ・ピタピタ・ピラピラ・ピリピリ・ピロピロ・ピチット・
ピチピチ・ピュンピュン・ピイヒョウピイヒョウ・・・ビ音についても同様。・・・ビジョン・

ビク・ビフウ・ビワ・ビッコ・ビロウ・ビリ・チョビチョビ・ビックリ・
ビッシリ・ビクビク・ビンビン・ビトビト・ビュンビュン・ビチャビチャ・ビッショリ・
ビシビシ・ビリビリ・・・

ヒのアワのミのココロ。

＜ミ＞の量――生まれながらのアワの量。その潜在アワ量が開発されただけ、その人の＜ミ＞の波動量が増す。
＜アワ＞とは、＜ヒ＞のチカラ、則ち、アマ界にワされたカムの量のこと。
我々は、対象のもつ、＜ミ＞のあらわれを通して＜ヒ＞をヒキ出し、ヒヒキあうことによって生きている。

あらゆる領域にわたってのアワの発見。
その意味～根拠を伝え得る度合い。

1994・10〜

脳に＜ヒ＞の根源波動を感受・認識＝言葉する。〜共振的に発生させる。
＜ヒ＞の根源波動をうけて表現したものでなければ、真に人の心をうつことはない。
又、＜ヒ＞の根源波動によって感受しミにつけたものによってでなければ、真に＜表現＞を読んだ〜とは言えない。（ヨミトリ・ナラウ・ウツシ・マツル）

逆序の能力から逆序のサトリへ
＜イ＞（自分の脳）によって＜ミ＞（自分の心）を教えるチカラ。＜イ＞と、＜ヒ＞の根源波動との対向（ムカヒ）によって、＜ミ＞を教える。

あくまでも＜ヒ＞の根源波動（カム－アマ対向発生）から照らし発せられるものであってはじめてイミをもつ。その＜ヒ＞の深さ〜波動量を自分にワカラセル（逆序する）。カンの鍛練。

ヒヒキ――　「抽象」――根源的なモノ〜本質本性をヒキダス。
抽象能力とカン

仮装畑・身体・脳・感受性・潜象カン・生命の基底波・潜在アワ量・・・・・・あらゆる領域・における潜象―潜象過渡（において、育て、鍛練する。）

ヒ〜ヒキダス〜ヒヒキの実践。
たえず＜ヒ＞からの発想ができるよう・＜ヒ＞から本質をとりだすことができるよう。

力をヌヒテ（抜いて）集中・転換。

ヒの根源波動からの自在な放出。それに至る鍛練・方法の開示。

クヒのサトリ。力を抜いてアワのヒを受けられるよう。
クヒアラタメの本来的なイミ。

京都盆地の四方の山並みに沿って、相似形に雲が山肌のように集まり、天空にはまるで雲がない。

（1994・10・31）

＜カ＞への思念感受～カンなくしては、考えるということはいかに～しようとも、その根本を欠く。

（現在までの各号でも記しているが、次号以降さらに展開）

場づくりの波動量の度合いでのみあらわれるカミの波動量。

＜ヒ＞の生命カンのウツシ。ヒビキ。

・・・を・・・たらしめているモノ、その根源的なハタラキ・チカラのヌシ。

ヒフミヨイの平衡感覚。

ミミの三半器官が脳～全身と連動してつかさどっている（ハタライテイル）のは、現象世界の三次元の平衡感覚のみではなく、この潜象―潜象過渡―現象の、発生過程―還元過程にカカワリマタガル、平衡感覚～生命のカミに向かうカミ感覚～向上カン～球感覚。

ミのエネルギー補給とミのヨロコブ、ヒ→フ→ミ→ヨ→イへと発生的であれば、ヒとミは統一的に展開され、ウマレヨミカエル、ウツ（ウヅ）感覚が訪れるが、

イの欲望の自己回転にまかせれば、ミのエネルギー補給は断たれ、ミとイは分離的（バラバラ）に展開されることとなり、平衡感覚の喪失～自滅の方向へつっぱしる。

脳～意識も、アワの、ゆるめてうけるハタラカセカタ、ができるよう。

アマーカムのハタラキを＜ヒ＞としてヒキシボル。

＜ヒ＞――真に創造的なチカラの、発生機構。
又、それを用いる根拠を示すサトリ。

アワの用意された場の度合いでのみ、サヌキ～現象～判断行為は出得る（あらわれうる）。

＜カ＞のカカワリの場を（刻々のアワの発生のマを）知る～用意する。

アワにヒラメキを入れて（起励して）生きるクセをつける。

言葉に不信を持つ者の、無意識の根拠は、ミの感受にヒビカナイママの、又、ミの感受を鍛えヤシナヒフカメルことのない、言葉～言語による思考（大脳の空転）への拒否感。

＜ヒ＞――ヒタリマワリ・ミキリマワリの重合。

＜ヒ＞の発動により、
大脳二次波動による観念作用・欲望波動・脳の自己回転が止まり、転換し、自ずとたちあらわれるミの感受（アワ）の発生にマカせる～ヒビキアワせる。

アワの前駆により刻々のミの感受音（アワネ）として、ヒトツヒトツ、マトマリ＜表音＞されていく。

導き手がなし得るのは、方向性と根拠（物理）を指し示し、発生の条件～場のつくり方と、エネルギー補給の根拠・方法をサトスことまで。
アトハ、本人の内部において、アワの微波動鍛練により、潜象のカのカカワリを感受し、自ずと発生するのでなければ、ワカリようがない。

あるレベルに達したとき、力をヌヒタ、アマーカムにヌケタ、一部の者からは、老人性痴呆やキチガヒ・クルヒとみまがわれる程の文体や存在様式となることがあるのは、脳の自己回転の停止のさせ方をサトリ、そこに発生～感受しうるモノ（コト）ノミを（にしたがって）コトバ・オコナヒをなす故である。

＜イノチ＞

我々の＜イノチ＞が、＜イ＞の持続であり、持続されるモノが、五つの素量である。
我々の＜イノチ＞が、＜ミ＞や＜イ＞の潜象の＜マリ＞と＜アメ＞の交流によって保たれていることを、実感として感受していたカタカムナ人。

・・・その驚いている私自身の心は、私の裡に、＜ヒ＞＜ヒキ＞された＜ヒ＞が＜アマナ＞としてやどっているもの。――――であることの実感。――――潜象物理入門の第一歩。

＜カタカムナ＞にはそうした生命のサトリのみならず、その「生命」の力（心身の元気）を増進させる物理（イヤシロスベ）や、補給する方法（アマウツシ・カムウツシの技法）まで示されている。

後代人とカタカムナ人の最も根本的な違いは、自分たちの生命のヒ（フトヒ）～ヌシのカカワリ（の方向）に対する潜象カン・「感受性」と「判断力」を失ったこと。
これを感受する感受性がヨミカエラぬ限り、大脳知能を正当に働かすことは不可能。
それができぬ以上は、生物としての生存の基本条件を欠く故に、個人としても、人類としても、癌化・滅亡という結末に至るのは必定。（神秘思想でも観念でもない、天然宇宙の厳然たる物理）

・・・ヒトツヒトツ、結晶がヒフミヨイと発生し、またヒトツヒトツ反転して（左旋・右旋のウヅとなって、）順々にアマへ還って行く。いかに大きな現象も、極めて細やかな微波動次元の潜態からなりたっている。・・・・・・

ヒを養うスベ
カタカムナの人々は、ミツゴの魂に生命の基底波（向上性・カミ感覚・生命カン・潜象カン）――――本来、生物が、本能としてもっている最も根源的な生命波動――――を植え付け、その性質を育て、鍛えることを、人間の親の最高のオキテ（義務）とした。
それができるためには、親自身が、生命の基底波をしっかりと鍛えもって（ミにつけて）いなければならない。（胎教・育児文化）

ヒイマのヒラメキ

アマのイブキ

今年は草むらや仮装畑に走るイモリ〜トカゲが多い。
仲間が宇宙を飛んでいるせい？
それとも雨がすくないせい？

この夏はあまりに暑く、ただひたすらアマの巨大なイブキ〜にヒレフスノミ。

あまりの暑さ〜降らない雨の連続に、さすがの雑草ものびなやみ、
葉を枯らし、根を保護して耐えている。

（1994年7月）

アマのイブキの厳しさを
ミに
39度8分の最高気温（京都）をふくむ各地では、
室内のあらゆるものが熱を発し、柱、壁はもとより、テーブル、しょうゆビン、チリ紙、・・・・
に至るまで、夜になってもその熱さが逃げることがない。（1994年8月）

大学闘争

1969〜大学闘争――
依拠すべき何モノもないという情況〜押し出され方。
まさに空白の＜　＞を出発点として、どのようにその根拠〜波動レベルを深化させ得るかが問われた。

ヒ　ト　　・・・・・・ヒト　トハシンニナニデアルカ

カム－アマの、重合。カム－アマ根源のヒにおける統合。

停止すること。バリケードをつくって、入って、何もしないこと。それをこそ《宣言》した全共闘。永続的ストライキ。
――このことの全的根拠。
＜イ＞のレベルの大脳二次波動の動きによる様々な文明的〜人類史的〜＜日本＞的退廃。それらを停止すること。それらをつくりあげている既成秩序〜サヌキ的権力構造〜暴走の停止・解体。

何を求めていたか。

全存在的な転換〜タタカヒ。何よりも自分自身に対する。女性なるものの本質の深度を問いつつ（序＝断片的ヴィジョン（4）参照）、どのように自己変革〜発生〜鍛練〜深化し得るか。その根拠・条件の創出。この問いと同時に、そのことを通じて関係性〜全情況〜全幻想領域の転換を追求した。

アワにうらうちされた、ミの波動を育てうる＜場＞（ヒ）を、根源的転換を、存在を賭して求めた。

すくなくとも、ストライキ宣言〜授業秩序停止過程における、生き生きした発生感覚。ミの体験波動、その振動。

そして、にもかかわらず、存在しきれない落差〜マとして雪崩れていたもの。・・・・・・・

それゆえに、存在と表現の落差としても露呈していたもの。・・・・・・・

＜いま　自分にとって最もあいまいな、ふれたくないテーマと、闘争の最も根底的なスローガンとを結合せよ。そこにこそ、私たちの生死をかけ得る情況がうまれてくるはずだ。＞（バリケード的表現　1969年8月　松下昇）

・・・・・・・

私（たち）にとって、仮装被告（団）の思想〜発想に出会い得たことは、大きなスクヒであった。

とりわけ、α・不可能性表現論　β・情熱空間論　γ・仮装組織論　と、（1970年1月3日　なにものかへのあいさつ）（＜ハンガリー革命＞――＜六甲＞　1966年11月）において提起されている、その表現を目にした時は、哀しみに満ちた男たちの表現史の果てに、ようやく、このように表現し得る存在が、この時代に存在し得ている、という静かなカンドウ〜ヨロコビをヒトシレズ感受していた。

そのことは、更に、大学闘争を媒介する＜　＞〜（　）闘争、＜　＞〜（　）裁判過程において、実践的に展開されていった。

今、＜私＞が、行っている作業は、これらの過程で、又、（ ）表現過程（＝別記）で、ある場合には、＜分離＞というカタチをとってしか（こそ）、表現しえたもの（しえなかったもの）、そのものを、そのオクにあるものを、とりだし、深め、アワの微波動鍛練として自他の、振動波～固有振動を、現象＝潜象のムカヒ　又、現象の正・反　の振幅をもってキタヘヤシナヒ、高調波として転換し得るか否かの、ヒトツノ実験～実習の序である。

又、仮装を、潜在アワ量鍛練～ヒのミの波動交換としてではなく、イのレベルで展開する場合の退廃。ヒのミのアワの微波動鍛練を伴わないあらゆる試みは、意図に反して、かならず、退廃～低レベルの縮小再生産・閉塞をうむ。このことの仮装被告（団）としての対象化。

あらゆる領域において、潜象のヒのアワの、ヒ・フ・ミ・ヨ・イ　と、ヤシナヒ　育てる　ココロ。
どのようなささいな領域～オコナヒについても、この、同じ深さの潜象＝潜象過渡の振動波をもってなされるとき、マノスベの　あらわれ　となる。

生半可でない、徹底した基本巧の練習。
この、心身体への強制振動。
カタカムナの潜象物理によって脳のアマナの潜在力がひきだされるヨロコビに対応する、身体の潜在力がひきだされることのヨロコビ。　（１９９４年９月８日）

７月の梅雨以来、約二カ月ぶりにようやく降ってくれたたっぷりの雨の後に。
クーラーをもたない小学生の声・・・「今年の夏は暑さでつかれたなー。」
（１９９４年９月１７日）

生命のヒ（アワ）を鍛えることの大事さ。

”六甲山系の山並みが気のせいか変わって来ている。今まで気づかなかったような岩肌がところどころ見え始めている。木が枯れて見えるわけではなく、緑の中から見える。山肌が変化しつつある。“
（１９９４年１１月）

甲山事件。
全幻想領域へと存在をヒらくことによって生命のいとなみのしくみをわかり微バランスを生きる。その振動波動量をアワ量の鍛練の根拠から提出しうる他者の非在。
暴力的な、幻想領域の開き方〜引き裂き方。
〃　他の幻想領域への回路の求め方〜イキノビカタ。
代理心中を工作することで、対幻想を閉ざし、責任分担として永続化する。
ねじれた逆仮装。何重もの欺瞞。
このツミの本質を、共ににないうる、他者〜関係性の非在する裁判法廷。

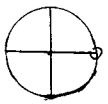
ある（一つの）幻想領域の閉塞状態からの衝動を、他の幻想領域への切り裂き〜噴出〜殺〜としてのあらわれ（によって出口〜回路をみいだそうとする）。
出口を見いだそうとするのは、各幻想領域そのもの。

α〜β〜γ・・・μ〜
往環〜うけわたし〜ゆらぎ
解放系（開放系）として、幻想領域相互が支えあい、アワ鍛練しあう。

地球のアクビ
アマのアクビ
ノビ

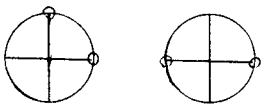
存在のミブルヒ
ノビ　チヂミ

アワの前駆流～マのココロ。
1・17大激震。（1995・1・17～1969・1・17）
アワは、マを用意するハタラキ。微小から極大まで、あらゆる位相差のマを。



アワ
カ
ヒ、ヒヒキ
ヒト
ヒタリ
トヒ
ヒカリ
ア
アヒ
カヒ
カカワリ
カタ・カカ
タカ・カサ
サカ
サカキ
サカヒ
ヒサ
ヒトツ
アトヒ
アモ・アト
アカ・アカキ
キヒ
アワトサ
アキカタ
カタカ
ヒトワ
ヒ゛ワ

アワシ
アカシ
アイ
ハシカル
ヒハ
ハヒ
ハワ
シト
ホ
ホト
ハ
イ

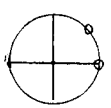


アワチ
カミ
ヒミ
アウ
カタチ
チカラ
ウタヒ

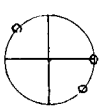
アワ・アカシ大激震――震源と根拠（図象符・参照）

アワ（シ～チ）とそのマワリのウミ・海峡（アマ）～アカシが震源であるイミが重要であり、この声音のヒビキ～振動の本質をとりだすことなくしては、
激震としてヒトビトにも訪れた・・・・・は、人々によってその本質＝最も深い潜象震源に気づかれることのないまま、結局は現象面での諸追求のレベルに収束してしまう。
アワのチカラを震源（真元）とする＜1・17＞激震。巨大なマ～カ（カヒマ）。アマによる～闘争。
ナは、各人の発想源をあらわにしつつ、兵庫県南部地震～阪神大震災～阪神淡路大震災～・・・等々変遷しつつあるが、一方、地球は再び80％の収縮期に入っているという説。様々な天変地異は世の終わりの徴～イエスの再臨が迫っているとする世界宗教。
作品＜六甲＞～＜包囲＞～＜　＞闘争の位相からは、六甲大地震（概念集　12）として表現されつつある。

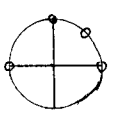
現象としてあらわれる～表現される＜思想＞の、その発生の潜象と潜象過渡のしくみ・根拠をこそワカルことなくしては、現象しているその＜表現＞をワカルことにはならない。
まして伝達・継承・深化・応用することは。
＜　＞内は、＜地震＞をふくむあらゆる言葉～概念におきかえられる。



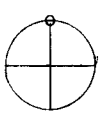
アクビ



ノビ

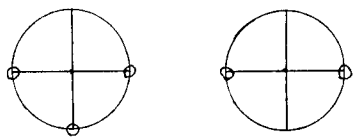


ミブルヒ（イ）



チヂミ

ハシカ。



1995年3月8日以来〜、11才から18才!までの4人の女の子たちが、40度以上の高熱を発して次々とハシカにかかっていった。

熱によって浄化されるものがあるので、内攻しないよう肺炎を併発しないよう、食と様々な手当を行い、アマウツシをおくり、赤い発疹が全身に出きってしまうよう（口内は白いアワ〜粒状発疹）、昼夜を問わずヒトリ看護をつくした。

四つの床に四人が次々とまぶたを赤紫状にしてウワゴトにふるえるさまは、アマのイブキのすさまじさに、いのらずにはいられないが、最初にかかりクラクラする、と症状を訴えた11才の子のみ、回復にむかった10日目に、自転車にのせて（本当はしない方がよいぐらいだが）、医師に余病の有無の確認のため診てもらった。

高熱時にその子の求めでふとんの中に入れていた青ネギは、すべてをすいとってくれたかのようにビックリするほどパリパリにちいさく々さく、ヒからビていた。

余病はなく、他の子たちも医師にかかることなく、一連の症状の後、序々に回復していった。

誠にアマのイノチのイトナミの波動、イキ・イブキが通過〜透過する様を、ヒシヒシと、ミのアワの感受に刻む日々であった。

「概念集12　――――六甲大地震との関連で」（〜1995・3〜松下昇気付け刊行委員会）への、感想〜ヒトツのヨミカタ。

記述者の発想の振動〜アワ過程、潜象過程〜ウマレカタ

ひろがりかた、ふかまりかた、ゆれかた、転換の訪れ方

それらが不可視の振動〜音楽として、鮮やかに表現されており、聴く者には聞こえ、感受しうる者には感受しうる震源〜根拠の究明〜追求へと誘う内発力〜喚起力を持ち得ている。

ヒトツヒトツ・・・

ヒトツヒトツシッカリ感受して行うことによってイキイキと元気になる。ということは、ちょうどよいサヌキ・アワのフトのチカラでやれば、（則ち、マノスベの生命活動には、）ヤタノ＜カ＞（イノチがヒトツ）発生する、という感受性の鍛練になる。

カムアマ始元量は、対向発生（フトマニ）してくるのだから、我々生物の感受（アワ）は、そのカカワリを感受しているのであり、我々の脳も、それを感受し、認識に出すことができるはずなのである。

＜ヒ＞――カム－アワ

アワの感受性能・・・・・・共振・ヒビキ・アワせる。前駆してアイワする。カムのウツシを受ける能力。

＜ヒ＞――総合・一なるもの・根源。

非在～否定――現象に対する潜態。

カタカムナ人は、自分たちの生命にカカワリ、その生命を生かしているモノを感受して、そのモノを＜カ＞という声音にウツシて＜カ＞とよび、宇宙の万物万象が、＜カ＞によって生起していることを感受し、その状態を、四十八の声音にウツシ、あらゆる言葉を作り出した。↓＜日本＞語のハジマリ。

感受し得るには、
脳の波動～全身の細胞（ミ）の振動波（ヲ）をトトノエ、
ミの共振作用が起きるよう、カのミを全身～全脳でわかる（感受しうる）よう、
波動をヒビキ・アワせる。（共振波動・同期発生）
ミミも（メも）ココロも澄ませ、環境と脳のオクのアワのカン（カム）のハタラキにマカセテ。

ミのウチからソトからハタラク、＜カ＞のチカラの感受。

意味と根拠・方向軸がわかっていても、になうべき主体の育て方についての明らかな根拠・方法（エネルギー補給方法をふくむ）とともにでなければ、真に根源的・情況的提起たりえない。

（1995年1月）

１９９５・２・２

１９６９～闘争と、１９９５・１・１７～アワ激震との関連について、子供達と話し合う。

ヒトの脳のアワの感受性の育て方についても。

又、１９７０年代の逆女区～（ー）室～μ区～Ｂ１０９～Ａ４３０～自主ゼミ～Ａ３６７、１９８０年代の～古本市～ＲＢ３０２～刑事・民事公判・人事院審理～・・・について各々が体験しているユニークな＜場＞について。

様々な生命活動（オコナヒ）をする時、それをする自分の生命のアワとサヌキのチカラを知って（則ち、そこに思念（アワ）を入れて）マノスベの行動（サヌキ）になるようにすれば、新たな＜カ＞（カムウツシ）が発生する（よいイノチがいただける）、というカタカムナの「フトマニ」（生命の対向発生）の物理。

アワ――感受する生命のチカラ

サヌキ――感受に基づいて判断行為を出すチカラ

アワとサヌキは同時的にハタラキアウ。（対向発生・互換重合）

アワのチカラ（ヒ）をそのものとしてとりだし（ツ）意識（ミ）に上げ（ヨ）認識（イ）に出す。

五感の身体的な感受性を鍛えることが、とりもなおさず、脳の感受性（直観）の鍛練向上に、直結して運動する。

マワリテメグルやカタカムナの大極拳の実習を本気でやれば（手足や身体の姿勢や呼吸作用のヒトツヒトツに思念＝ヒラメキを入れてアワを起励して、よい行動を出すようにつとめれば、）積極的に、大きな力＝イノチの発生を促す（カムウツシ・アマウツシを充分にいただける）。

ヒラメキを入れる――刻々の逆序のサトリの実現。感受性（アワ）の鍛練。

自分のアワにヒラメキを入れて生きるクセをつける。

イマイマのヒトツ、ヒトツにヒラメキ（思念）を入れて（自分の感受性を起励して、正直にマワリテメグルを実習し、）何をするにも、アワの心でサヌキを出す、という生き方を実行すれば、天然給与で（オノヅカラ）、ヒトツヒトツに＜カ＞（イノチ）が発生（カムウツシ）し、イヤシロにいいかされる。

この物理（ヤタノカ・フトマニ）を知って、・・・一歩一歩、一息一息（ヒトイキヒトイキ）、しっかりと感受してやれば、明らかにイキイキと元気になる。ちょうどよいサヌキ・アワのフトのチカラでやれば、則ちマノスベの生命活動には、ヤタノ＜カ＞（イノチがヒトツ）発生する、という感受性の鍛練になるわけである。

アマの強制振動。
それによって、その厳しさによって、ようやくヨミガエリ、本来のスタート地点に立ち得る人間。

生きている列島の、刻々の対向発生。

琵琶湖から淀川
大阪湾の二重渦
明石海峡
淡路　サヌキ・アワの鳴門渦
列島と海域の　この
子宮口におけるイノチの対向発生を妨げる、
人口アイランド群
海を埋め立てた関西空港
削り取られた島々の山、列島の山
裏六甲には文明廃棄物の山

未来からの強制振動。
カム－アマのマノスベのイノチのリズム～周期からの強制振動。
連動する宇宙・地球生命の周期からの強制振動。

アマ自身の存在闘争。'69闘争から・への、ヒビキアヒ。
人々のアワのココロをユサブリ、ヨビサマシ、フルイタタセ、ウエツケル。

人間の側からのとらえ方では本質は見えない。
前駆するアワのチカラ。

現象している行為が、どのような方向軸をもつ行為の断面であるのか、その潜象アワからの方向軸の感受なしには、行為への＜判断＞や＜評価＞はゆるされない～根拠をもちえない。
（1995年・1月～2月）

アワの発生根源から・へ・まう〜いう。

ウマレキヅカレはじめてもいるアワへの感受。――を、現象の現象的解釈へと収束していこうとする力、それこそが、ハルマゲドンそのもの。
アワの微波動震源〜発生に、サヌキ的対応しかなしえない者。

アマをめぐる攻防。アワ地震によってもたらされた、ユリウゴキハジメタ、人々の巨大なアワココロ〜非権力的天然力に対し、人間レベルのサヌキ的権力支配を回復せんとする、動き。

いわば、ポカッと開いた宇宙からの穴を、人間レベルのワクにおしこめようと、大地における主導権を握ろうと、取り戻そうと、ヤッキになっている国家支配権力。
大激震で西日本にかたむいている渦の中心（国家から見捨てられたという意識を一例とする非〜無政府性）を首都権力集中へと比重をおきかえんと、（予言というカタチでアマの一端をとりこんでいるオウムに対し）情報戦・大部隊を演出動員。ドクマスクソウサクブタイ。タイホ。
コドモノブンリハクダツ。
幻想性のヘゲモニー奪取のシレツナタタカイ。

（1995年3月）

ウツ。カムウツシ。アマウツシ。
イノチノチカラヲウツス。
イノチヲキタエユサブル強制振動。
オサエテハナラナイ。

ヒのトのヒラメキ。

アタマのオクの発生装置〜機構。
宇宙の発生装置に対応する、アタマノナカノ　カシラの発生装置、カのカカワリのヒのト。
まさにヒのト→ヒト→人　とナヅケラレタゆえんである。
宇宙のヒとヒを交流〜共振〜統合するヒのト。

潜象の発生〜還元のシクミ――――ヒのしくみ。

脳の発芽

潜象への感受性をヤシナヒソダテル＜日本＞語における表音表現

カサッ　ハラリ
ヒラヒラ　カサカサ　パサッ　パラリ
カサコソ　コトコト
ワクワク　ドキドキ
ドーン　グワァーン　ドドドーン　ユッサユッサ

その他無限につくりうみだされうる表音表現は、現象そのものよりも、それをうみだしている、現象のオクにある潜象のヌシ～チカラ～ハタラキと
潜象から現象が発現する潜象過渡を動的に表現し抽象するコトバ～表現。
極めて動的な抽象語～潜象過渡表現。

この感覚～感受性をもって他の音も感受していくと、一音一音の潜象的な意味（声音思念）～ハタラキが、ヒビキ、感受されてくる。

シンシン　シトシト
パラパラ　ポトポト
チロチロ　トロトロ
ワラワラ　ハラハラ　メロメロ　オロオロ　ドロドロ　タラタラ　マラマラ　アレアレ　マアマア　イソイソ　カンカン　カタカタ　カミカミ　カリカリ　リンリン　トントン　ピトピトピチピチ　ヒリヒリ　ヒヤヒヤ　ヒウヒウ　ピカピカ　ピキピキ　ヒシヒシ　ヒソヒソ　・・・
ヒマヒマ　ヒヤヒヤ　ピユピユ　ピヨピヨ　ピリピリ　ビリビリ　ピロピロ　ヒンヒン　ビンビン　ピンピン　・・・

これらの例のように二音のくみあわせがくりかえされるとき、
一度目は脳の前頭部にヒビいて現象を表現し、くりかえされる二度目の音は脳のオクに送られ潜象の発生根源～ありかを示す。則ちアワの感受性を鍛え高め、直観を養う。

あらゆる天然自然（人間の心や感情もふくめて）のイトナミとそのオクにハタラクモノを、くりかえされる異なる声音の組み合わせ・そのくりかえしによって、潜象―現象の発生還元（正反四相・対向発生・互換重合）のありさま～ハタラキを見事に定着（抽象）し、かつ、根本にあるサヌキ―アワのフトマニの、アワの感受性鍛練の方法として、方法化されている。
実際、あらゆる音言語表現が無限に可能である様（サマ）、潜象のみえない世界でのハタラキとそれを抽象した声音言語のヒビキアイの様は、おどろくべきことである。

脳のミにヒタ（ヒダ）をイレル。微波動〜脳のミの、潜象中心核からの微発生。

ちょっとふりかえって耳にきいてみるだけで無限の音のヒビキが湧きあふれてくる。

（アワニフリカヘリミミニキク・・・）

サクサク　サラサラ　サワサワ　カリカリ　カンカン　カラカラ　カキカキ　ザアザア　ドードー　ブンブン　ゴーゴー　ガーガー

ラリラリ　トコトコ　ペラペラ　フンフン　キャァキャァ　ドーンドーン　ビクンビクン　ペトペト　パンパン　ミンミン　ヌルヌル　グングン

サヤサヤ　ソヨソヨ　ゴーゴー　ビュンビュン　ザンザン　ザカザカ　ジャブジャブ　ザブザブ　ピシャピシャ　パチャパチャ　グイグイ　シラジラ　ワラワラ　ワサワサ　ムラムラ　ムカムカ　ホトホト　コレコレ　ドッドドッド　ゴンゴン　グワグワ　シャリシャリ　ミキミキ

ペチペチ　ザクザク　ソッソッ　サッサッ　ピッピッ　トットッ　ピョンピョン　ピョコピョコ

シメシメ　シクシク　ヨシヨシ　ナゼナゼ　ニコニコ　サムザム　ヒエビエ　ポロポロ　ガンガン　ギクギク

シズシズ　ユルユル　ハヤバヤ　ドンドン　ゼンゼン　ザラザラ　マロマロ　プンプン　セコセコ　ズンズン　パッパッ　グワングワン　ポイポイ　ドロドロ　クチャクチャ　ペチャペチャ

メチャメチャ　・・・

・・・

あらゆる表音抽象（ヒビキ）に満ちている。

スースー　クシュクシュ　ゼーゼー　ゴホゴホ　コホコホ　パチパチ　シミジミ　ジメジメ

クルクル　タンタン　ポキポキ　ユタユタ　サクサク　チクチク　ズキズキ　キリキリ　トロトロ　グズグズ　マチマチ　ワルワル　ワレワレ　ワロワロ　ポカポカ　ギンギン　ギシギシ

ギラギラ

コソコソ　パキパキ　ピキピキ

スイスイ　カリカリ　グイグイ　グングン　ドンドン　ズンズン　ゴワゴワ　ソロソロ　フワフワ　ゴシゴシ　カミカミ　カムカム　ゴクゴク　クチャクチャ　タラタラ　ダラダラ　プチプチ　プカプカ　プヨプヨ　プルプル　プヤプヤ　プユプユ　プアプア　プイプイ　プウプウ

プスプス　プチプチ　プツプツ　プトプト　プニプニ　プハプハ　プフプフ　ブウブウ　ブツブツ　プリプリ　プルプル　フカフカ　フキフキ　フサフサ　フムフム　・・・

読者も思いつくままにヒラメクままに言ったり思い描いたりかきだしたりされてみるとよい。

壮大な音の嵐・宇宙音楽がきこえる。

地球が宇宙勢力総体の中で生き回転し音を発しているサマが、マザマザと聞こえてくるであろう。

これらの音表現のみによって充分コミュニケーションは成立する。

最初の一～二～三音で抽象～表出し、カムウツシアマウツシを受けて、くりかえす音で、振動波を脳のオクにオクリ、振動高調波を発生定着、共振的に認識過程へともっていく。くりかえしのマ。サンカーラー（脳の無意識の第四過程）をハタラカセ、逆序の作用をおこなっている。これによって脳の感受性能を飛躍的にたかめている。

ノンノン　ノロノロ　ピンピン　ピロピロ　バンバン　バラバラ　ベンベン　ベロベロ
シンシン　シトシト・・・この四相のリズム。

カロカロ　ヒタヒタ　イキイキ　イヨイヨ　イマイマ　イヤイヤ　イロイロ　イライラ　イソイソ　イサイサ
ロウロウ　ハロバロ　ポロポロ　オロオロ　ウロウロ　コロコロ　クロクロ　ソロソロ・・・
このようにして、広がりはりだし続くロの思念が感受される。（六方の環境からカムのカカワリが続く・・・）

（1995年5月）

一音ごとの声音思念を感受し抽象していく作業の序として、カカタカムナの上古代人（たち）は、このような無限の感受潜象作業～体験をくりかえしたことであろう。（潜象物理によるカタカムナの＜日本＞語を成立させる過程）

この作業を展開していけば誰でも、何の手引きもなくとも（既成の辞書なしに）、＜日本＞語の、発生過程を示す辞書をつくることができる。

このような声音表現の豊かさ（の継承）が基底にあるがゆえに、今も、どのような新語・外国語も自在につくりとり入れ、＜日本＞語化することが、できてしまっている。

いわば、前～ヒ＜カタカムナ＞語、前～ヒ＜日本＞語ともいうべき厖大な表音域が原初性のままに密充塡・広がっており、それは今も、無意識に受け継がれている。あるいは、対向発生し続けている。

潜象物理による＜カタカムナ＞の言葉の成立の、壮大な対向発生とヒヒキ作業の＜現場＞が、共振しうる者の波動量の深さに応じて、今も、いつでも、開示されるのである。

ヒトトシテノイキカタ

ヒトとしてのイキカタ。心身脳のハタラカセカタ。たべかたのみかたねむりかたすわりかたあるきかたはしりかた・・・潜象カン〜生命カン〜アワの感受性の育て方深め方。
あらゆる〜にわたって、その根拠と方法をトヒカヘス。

ヒライテ　オシエテ　ユルメル

（前号では潜象物理を真にワカルための、感受性鍛練に不可欠の＜実習＞としても、トキ・トコロ・マについて整理した。自己鍛練としての不可欠性。他者への伝達には、更に別のレベルの鍛練が必要）

現象アタマを意志的にはたらかすよりも、潜象カン（球感覚）のアンテナを鋭く立てていればよい。――その裏付けは、自己の直観の絶えざる鍛練にある。

宇宙のあらゆる現象事象の中に潜在し、個体側の＜ヒ＞（アマナ）として、刻々に環境のヒ（カムナ）と共振（ヒビキ）している。

わたしの裡に＜ヒ＞＜ヒキ＞された＜ヒ＞が、＜アマナ＞として、宿っている。

――潜象物理入門の第一歩。

交換不可能な・・・のウメキ（序＝断片的ヴィジョン(13)最後の一行）

――アワのチカラはアワそれ自体としてとりだされることなくしては、〜されえない。

科学をふくむ現人類の諸思想、諸領域が、不可解で行き詰まっている問題は、ほとんどアワ系の（潜象の）領域。

アマハヤミ

生命のチカラは、いかにカムから変遷して現象に生まれ出たとしても、その我々生物の生命のチカラは、潜象のママ。則ち「ヤタノカ」は、カムウツシ・アマウツシの「カ」である。したがって、現象に生まれ出た我々個体の生命力とは、カムからうつされるアワの「カ」と、アマからうつされるサヌキの「ミ」（アマナのカ）との、「カとミ」であり、それが生命の根源である。

その「カ」（カとミ）の感受を、現代人は、失ってしまっていた。

精神作用の場合も、充分に高まったアワのチカラ（ココロ）で対向発生を続ければ（ヤタノカ）よいイノチ（判断行為）が発生するが、充分な用意のないアワの心（チカラ）で一方的な（対向発生のない）判断行為（サヌキ）を出せば、満足な結果は得られないから、ことごとくに悩み、苦しみ、行き詰まり、ついには自殺ということになる。

およそ生命活動は、（立つにも歩くにも食べるにも呼吸をするにも、考えるにも、すべて）サヌキとアワのチカラが、ヤの状態出働けば、ヤタノ「カ」が、則ち生命のチカラが発生する。

「カ」の発生の速度は、アマハヤミ。

アマハヤミとは、「アマの速さのミ」であり、アマの速さとは、対向発生（ムカヒ）の場が出来る時が、則ち発生の場であるから、即時である。

発生の場（ウシ）は、則ちその発生の界面（トコロ）は、アマハヤミであるから、時間を要しない。

アマハヤミ――カのカカワリの速さ。

”カの伝達には、方向性はあるが、速度は光速以上の累乗指数的な超光速、アマハヤ（即時）。従って対向発生（フトマニ）という。“

「カ」の伝達はアマハヤ（即時）であるが、その途中に、発生の場があれば、「イカツ」（電気粒子や光粒子や電磁波）を発生し、その速度は光速度となる。

相似象誌第四号における＜ヒ＞の記述。

フトヒ――諸天体や、諸天体上の万物を構成する諸要素を生む元のヒ（玄）。
大宇宙の核。それが宇宙の大きな「遠心」となって、そこに向かって、大きな引力が働いている、とカタカムナ人は直観した。
アマのヒに向かう方向。
フトヒから、宇宙的な生命力が放出されている。（それが）すべての相似象の原型。

ヒ――太陽（アサヒ）のヒ。ヒトツのヒ。すべてのものの「根元・始源」をさす思念。
火山の火や、落雷の火や、自然界に表れた「火」をヒとよんだのは、それらの火のもとに、「アマのヒ」がある、という直観。
「モトになるもの」が「ヒ」。太陽（アサヒ）のモトはフトヒでありフトヒのモトはアマヒ。（アマヒの意味は次頁に記載）
モトから分かれたものの名にも、しばしば「ヒ」がついている。
太陽の一マワリ二マワリを、一日二日の日（ヒ）。身体にも、ヒザ・ヒジ・・・・。ヒコ・ヒメ・ヒマゴ・ヒ爺さん・ヒ婆さん・・・。

カムヒビキ――ヒの、最も根源的な、カム・アマのヒビキを伝える意がこめられている。

要するに、＜ヒ＞は、「大もと」の意味であり、すべての「ヒ」は、大もとの、「アマヒ」から分かれた、相似象である、という直観。
太陽（アサヒ）がヒとよばれるのも、フトヒの相似象として、アマの巨大な空洞（アナ）から発生した「ヒ」であると観じたからである。
おそらく太陽の中心核はアマナであり、我々のみている太陽の光は、その空洞輻射であろう。
現在の空洞輻射の、高熱の炉から生まれる火の事を、専門用語でも、「ヒ」とよんでいるのは「妙」である。
火山等の自然の火も、ものの燃える火も、我々の心の火も、すべてそのモトに、「アマのヒ」を観じたカタカムナ人の直観は鋭かった。

ヒとは、すべてのモノの「核」となって生命を支え、さまざまな物質を発生させながら、自身は目に見えぬ『潜象』である。（例えば原子核から陽子中性子が生産される事は我々も知っているが、現代の科学のどんな顕微鏡を用いても、「原子核」という物質を検出する事は出来ない。そこから陽子中性子が出てくることによって原子核の存在を認定しているまでである。このような「ヒのヒミツ」をしること」を、カタカムナ人は＜ヒジリ＞と言った。（後世「聖」の字をこれに当てたのも「妙」。）

アマヒ――「アマのヒ」ということ。＜ヒ＞とはモトを示す、元とか玄とか源泉（カミ）という意味のヒビキ。従って、アマヒとは、すべてのものを形づくる根元（ヒ）であるところの、アマ始元量そのものを指すと同時に、更にそのアマのモト（カミ）則ち「アマのヒ」（カム）を指向する思念をふくんでいる。

カミ――カタカムナ人の＜カミ＞は、「神」ではなく、川の流れの源を「川上」というように、そのモトを「カミ」へ「カミ」へと溯って、その本質をあくまで知ろうとする思念。

決して、人格化された神ではなく、「根源的な起源」の思念。

ヒビキ（カタカムナヒビキマノスベシ―第一首　イカツチヒビキ―第四十首・第六十五首）
ウタヒ（カタカムナウタヒ―第一首）
ヒフミヨイ―第五首
ムスヒ（タカミムスヒ―第七首・第十首　カムミムスヒ―第七首・第三十首　カヅムスヒ―第十七首　カムミムスヒ―第十首　ワレムスビ―第二十七首　オホワクムスビ―第二十九首　タカマカムスビ―第三十首　カタフトムスヒ―第三十六首　タケフツノムスビ―第四十首　チマタムスビ―第四十四首　オホトチムスヒ―第四十六首　ワクムスヒ―第六十首・第七十五首）
ヒコ（アシカビヒコ―第八首　イハツチヒコ・オホヤヒコ―第十四首・第三十五首　アキツヒコ―第十四首　シナツヒコ―第十五首・第三十七首　オホトマトヒコ―第十六首　ヒノカカヒコ―第二十五首・第三十九首　タニキヒコ―第三十四首　カナヤマヒコ―第三十九首　ナギサヒコ―第四十四首・第四十五首・第五十二首・第五十三首　ハツチヒコ―第五十九首）
ヒト（アマノヒトタマ―第十一首　ヤクサスヘヒトココロ―第四十八首　ヤクサアヲヒト―第五十四首　ワクツミヒトヨ第六十四首　アメノヒトネ―第七十三首　イサキクニヒト・（ムシヒト）―第七十四首　カムアマヒトタマ・イマウミヒトウツシ―第七十九首　ヒトアメノウツシネ―第八十首）
シヒ（シヒハタシヒフミカムミ―第十二首）
スヒ（スヒチニ―第十三首）
クヒ（ツヌクヒ―第十三首　イモイククヒ―第十三首・第三十首　アメノクヒ・クニノクヒ―第十五首　イククヒノツチ―第二十八首　アマノクヒサモチ・クニノクヒサモチ―第三十七首　アキクヒノウシ―第四十四首・第五十二首）
ヒメ（イハスヒメ―第十四首・第三十五首　カヤヌヒメ―第十五首・第三十七首　オホトマトヒメ―第十六首　オホケツヒメ―第十六首・第二十五首・第三十八首　フタヤヒメ―第三十四首　カサネワタヒメ―第三十五首　ハヤヲヒメ―第三十八首　カナヤマヒメ―第三十九首　トヨウケヒメヌ―第四十首　タキリヒメ・サヨリヒメ―第四十七首　イキツヒメシマ―第五十九首　トヨウケヒメ―第六十首・第七十五首　アキツヒメ―第六十二首　アワタマヒメ―第六十五首　ムスヒメ―第七十二首　カムアマヒメチ・ナホビチハヒメ―七十三首　ヒネシマヒネ―第七十七首　オホナミヒメ・アメノウヅメヒメ―第七十八首）
トヒ（オホトヒワケ―第十四首・第五十九首）
トヨヒ（トヨヒカミ―第十七首）
ヒトツ（ヒトツカタツミ―第十七首　イキノヒトツネ―第二十八首　アメヒトツハシラ―第三十四首）
ムカヒ（アマタマノムカヒ・アマクニムカヒ―第十八首　アマナアモリムカヒ―第十九首　マサカヤマツミムカヒマリ―第四十一首　ウシムカヒマリ―第四十四首）

ヒトワ（イマトハヒトワミコ―第二十一首）
ヒワケ（タケヒワケ―第二十四首　オホトヒワケ―第十四首・第三十五首・第五十九首）
カヒ（ミカヒ―第二十九首　ミカヒハヤビヌ―第四十首　カヒクシサリ―第四十一首　オキツカヒ―第四十五首　カタヘツカヒ―第四十五首　オキツカヒヘラナミ―第五十二首　ヘツカヒヘラ―第五十三首　フカヒウツシ―第七十三首）
ハヤヒ（シキシマハヤヒ―第二十九首　カラミミカハヤヒ―第六十六首）
ウヒ（ウヒチニホロシ―第三十首）
ヒノ（ヒノクニクマソ―第三十三首　ヒノヤギハヤヲ―第三十八首　ヒノカグツチ―第三十九首　ワツラヒノウシ―第四四首・第五十一首　タナカヒノマ―第六十二首）
ヒコヒメ（マノヒコヒメ―第三十五首　オホマヒコヒメ―第三十八首　ハニヤスヒコヒメ―第三十九首　）
ヌヒ―第四十四首
ツヒ―（ヤソマガツヒ・オホマガツヒ―第四十五首）
ナホビ（カムナホビ―第四十六首・第六十九首　オホカムナホビ―第四十六首　オホナホビメ―第五十六首　ナミアメノナホビ―第七十三首　ヤタナホビ―第七十四首）
モモヒ（モモヒクニ―第五十三首）
イヤマヒ（カムミイヤマヒ―第五十六首）
ケヒ（タケヒワケ―第二十四首　ケヒココロ―第五十七首）
ヒタリ（ヒダリミギリノ―第六十二首）
ハヒ（マクハヒ（アワセマクハヒ―第二十首）　オキハヒオキナギ―第六十八首　カムアマミチハヒウツシ―第七十首　ハヒタマ・ハヒオキナサキミチ―第七十九首）
ヒトミ―第七十二首
ヒネ（ムスヒメヒネ―第七十二首　ヒネシマヒメ―第七十七首　ヤマトヒネ―第七十八首）

脳の落とし穴

ソトへソトへと観念の満足を求めて思考〜行動〜対象的陶酔思考するパターンの崩壊。
↑現代に至る諸文明、又、それを転倒せんとする様々な試みにおいてのりこえられていない。

あたえられている根本のミの刻々の感受性鍛練の欠落。

心情や思いとはウラハラに、逆の、あらたな装いで登場する既成の想念の振幅内にからめとられていく。

思想の展開においても、又、他者への伝達の根拠においても、ミの感受〜吟味の無い思想のくりかえし・観念レベル〜脳の落とし穴　がこえられていない。

人々が、あらゆる思想が決定的欠損をかかえていることはわかっていても、それが何かという問いを抱いていても、それを展開しえないでいる。――肝心の脳の感受性〜アワ量が開発されていないために。天才も凡人もめいめいなりに陥っている脳の落とし穴〜にまず深くはっきりと気づくことなしには、何も始まらない。

どうしようもなく破滅的なほうこうへ突き進んでしまうということに、人々が気づいてもいることにもよる、そのことに本質的にはなすすべをもたないことを無意識に感じていること、への恐怖が、本質的救出の根拠をもたないまま突出する者への苛立ち〜排撃としても表出される。

又、いつの時代にもあった末世〜終末思想と位相差をこえうるモノ。

世代としてではない、方法としての全共闘。

現実にあらわれているレベルとそのむこうで無意識にもっているレベル。総体をすくいとる必要。

こ　の(深さ)をすくいとる深さの度合いではじめて、　をすくいとり、審理に参加しうる。

誰にも、又、どのような現象にも、生・反のあらわれがある。これはともに順序。
その自らのしくみを自覚的に取り出し、逆序のサトリによって調整をなしうる者。
反のままにまかせ、滅の方向へ〜のではなく、逆序してオシエカヘシテ、マノスベのイノチの発生方向へもっていくことのできる者。〜場。
順序のもつ正・反のゆさぶりの、天然の淘汰にかかるのではなく。

人間の側の大脳次元の思考をいかに展開してみても、あらゆる苦の因も縁も、（そのレベルにとどまるものであり、）ときはなつことは出来ない。
そこに、もうヒトツ深まった要素、則ち、苦のタネのモトのサネ（アマナ）となるモノの波動量が高まらなければ救われない、解決しない、という発想が欠けているためである。
同時に、その、波動量をいかにすれば高めることが出来るか、の根拠と物理、方法が用意されていなくてはならない。

又、このことに、ミをもって気づくためには、＜カムウツシ＞のエネルギー補給が不可欠である。（人間の覚作用は、＜カムウツシ＞のエネルギーがなければ発生しない。）
＜カムウツシ＞を受けずに、人間側の智能を、無理につきつめれば、（「神」や「アートマン」等のかたちをとった）神秘思想を生んで自己をくらます（陶酔）か、絶望の壁に突き当たって自滅するかしかない。

人間の脳（サンカーラー作用）にも、人間の側（ヒトタマ）と、環境（宇宙的生命－カムアマ）との対向発生（アマタマノムカヒ）による同期作用（ヒビキ）が働かない限り、真の「覚作用」は発揮しない、という潜象物理を、我々は、くれぐれも心にとめておく必要がある。

釈迦は、「ワヤ（生命体）のダムマ（よりよいあり方）のサンカーラー」、とまで言えたが、その生命の、同期波動の対向発生の方法（アマウツシスベ・カムウツシスベ）はわからなかった。

現代人は、以後
三千年の歴史の経験を見て来たのであり、この人類的な経緯をマットウに判断する「正当な覚」を発揮すべき条件と責任とを、併せ持つ「場」に立たされているということである。

あらゆるもの〜事態は、発生過渡の流動状態にあり、ある断面を人間はしばしば静止的にとらえ、意識し、しばしばそれ（その意識〜像）に拘束されているにすぎない。

潜象〜潜象過渡へのアワの微波動のきいた感受力をつねにヤシナフ。

五月に消えた土星の輪が再び消える。（１９８５・８・１０〜１１）
地球上からは次の周期は、四十数年後。

演技。仮装。その本質は、対向発生。

ミの感受性というよりは、つまるところ脳の好奇心の満足を求めるレベルであれば、宗教・科学・政治・・・あらゆる領域に教祖的にかかわる者たちの脳のイの観念性をチェックし得ない。

生命の復活や復活後の永遠の生命や来世や転生への願望以前に、生を受けているこの世界での、生命体としてヒトとして備えられ与えられているアワの潜在力を、与えているモノ〜チカラの根拠の深さに対応するレベルまで、自ら引き出し、開発しえていない。
そのことに気づこうとさえしていない。

可視化する能力の範囲をのみ働かせて突き進めば、アワの潜在力は退化する一方である。

アタマの良い理科系のサヌキ型人間が、科学そのものをふくむ自らの存立基盤への不安(アワ)を抱いた時、能力（サヌキ）を温存しつつ、アワ的側面を、オウム的なものに、包摂されていく過程～構造。

ではそのオウム～オウム的なものは、真に存在のアワ量を増し得る根拠と方法をもっているか。やはり、観念作用によるサヌキ的な能力の助長というレベルは越えられていない。

それ以上に転換しうる根拠をもちえていない。

＜悪＞としてのあらわれによって吸収し得る領域とし得ない領域。

インド思想の全過程・仏教の全過程・キリスト教の全過程・・・全世界思想と、その創始者のレベルをを乗り越え転換するものでなければならない。

大脳次元の観念作用によってではなく、ヒのアワのミの波動量～潜在アワ量のヤシナヒによって。

アワの鍛練

＜ハヒ＞――――サヌキ・アワ（ハ）に分かれる根源（ヒ）の方向。則ち潜象の＜カム　アマ＞の方向をさす。

則ちY方向↑楢崎皐月の造語。（現象界の正・反と、その背後との三つの方向から、より合わされる渦を抽象したもの。）

アワのチカラはあつても、鍛練されていないため、アワ量の発揮に至らない者。現象レベルで様々に動き、現実に対応し、人々のために働き、・・・していても、感受性はあっても、つまるところ、好みのレベルでしか発揮されず、アワ量は養われていない。

生きている限り、アワ性をもたぬものはないのであるが、しかし、＜アワ＞の性を「養う」とか「アワ量を増す」ということは、実は生やさしいものではない。

なぜなら、養うことができるためには、「根」がなければならぬ。そして、生きている限り、やはり「根」のない者はないのであるが、その「根」に、アワ性を養うことの出来る条件が具わっていないと、いくら自分では養おうと思っても、（サヌキ性は養えても）アワ性を養うことは極めて、難しく、アタマでサヌキを養ってみても、ココロの向上性は増さず、アワ量は増えないのである。

その条件とは、生命の基底波。

逆序のサトリ。

大脳の使い方の、一方的発達による弊害の歴史から、転換し、

いまや我々は、あとの半面を開発し、眠れる脳を覚まして、平衡的な発達を遂げる方向へ進むべき機が熟したと考えるべきである。

一切をヒのミのアワの振動波動量によって取捨選択する。アワ変換・アマナ転換。

（到達点の整理ではあっても、それを他者に充分わかりやすく伝える書き方の工夫が不充分であるためもあって、独言に満ちているという反発をかんじられる方もあるだろう。）

仮装被告（団）の根拠への深刻な問い（トヒ）の上に開始している作業。序＝断片的ヴィジョン。則ち、存在の潜在アワ量～振動波動量の高め方・その根拠と方法の提出抜きには、仮装被告（団）～仮装としての被告とは何か・・・時の楔・・・～概念集の系列の表現の根拠を、真に生かすことはできない。生かすとは、いつでも対向発生し得るということ。相互に、又、総体として。

ヒがアワであること。

ボサツとは、その本質は、
一切の陶酔観念作用を持たない、ヒのアワのカム―アマの放射～照らし。

アワのミの感受性鍛練のないまま、知識として情報として流通～横行する退廃。

＜サヌキ＞が真に深い＜アワ＞量にささえられているものでなければ、＜サヌキ＞は暴走する。その＜アワ＞量を育てる根拠・方法を持っていること。このことは、あらゆる領域において問われている。
又、内心のアワ性と、現象サヌキとの乖離に、越えられない＜　＞を抱いて苦しむ感受性豊かな人々が、根本的にムクヒスクワレル根拠～方法。

破壊や人為の無差別テロとみえる現象のオクにソコにヒメヤカに開始され、前駆しているものをこそ、我々は、この時代こそは、感受しなければならない。

五蘊のサンカーラーは、マサしく、潜象過渡の作用。

古来、天才者のコトバを、多数者が理解出来ずに見失ってきたものは、期せずして、潜象、又は潜象過渡の体験を示すコトバであった。

天才はミ波動。秀才はイ波動でおいかける。
しかし天才はミ波動の物理を解明伝達できない。
ミ波動の開発のしかた〜タカメカタ・フカメカタの物理が、今までは、無かった。

くり返しくり返しアワのミの潜象カンをヨビサマシ、定着させ、メを育てる。くり返し。

・・・年かかって〜年かかってもヨミカエリ発生すべき、その波動を植える。

カタカムナの潜象物理を本気で（アタマの先の語学学習ではない、心身にヒビキ、シム、ミの感受性を鍛練向上させるための、サヌキではない、アワのイノチをかけた鍛練が必要ですが）学んでみたいというココロザシを持たれる方は、どうぞ御連絡ください。
とりわけ女性。けれども女性に限りません。

作業の最終段階で、宗教法人法改正、高速増殖炉「もんじゅ」事故、死刑執行、オウムの解散決定や破防法適用手続きの開始等々、政治のレベルと時間把握が剝き出しになる動きがあらわ。大学闘争〜Ａ３６７の留置物品の一部を保管中の＜私＞の制限住居は、老朽化によるたてかえの転居要請〜家主によるＡ３６７物品の一部移動――どのような光景をくぐりぬけてきているか想像もつかないまま彼らはそれに触れ、移動作業をおこない、青いビニールシートがかけられている。降り積もる雪の下の、それら物品の対象化作業も転居準備とともに迫られている。
現在の場所へもどることを望んでいますが、主として経済的な理由等により、これは不確定です。
そのことを含め、新たな実験―鍛練実習の始まり〜深まりとして。

仮装被告（団）

〜１９９５年〜１２月〜